毎月十日廿五日發行

家庭雜誌

壹冊定價金五錢



明治二十九年十月十日發兌

第八拾七號

新刊發賣

世界叢書第一冊 ちやーるすだーうゐん

肖像及挿畫入　定價十五錢　郵税四錢

十九世紀は學術の時代なり理學の時代なり過去千八百年間に於てなしたる理學の進歩は此百年間の長足なる進歩に及ばざりき滊船、滊車、電信、電話、電燈、電車、病菌發見、血清治療、皆是れ此一世紀間に於て理學進歩の結果なりき理學の進歩は文明の進歩を來し文明の進歩は人類の進歩を來す十九世紀の文明は理學の進歩より來れりと云ふも敢て過言にあらざるなり而して此理學の進歩に最大の功績ある一人――十九世紀理學界の大王は誰ぞと問はゞ萬人皆異口同音にチヤールスダーウヰンなりと云ふに躊躇せざるべし

不幸にも此十九世紀理學界の大王は長く我國民より忘られたりき少くとも誤解せられたりき我社は之を慨し此書を出版して以て偉人の眞人物と眞事業とを紹介せんとす

章を分つて六と爲す曰く(第一)少壯時代……誕生よりケンブリツチ大學卒業迄を記す(第二)「ビーグル」號の航海……ダーウヰン一生の基礎を造りたる五年間の世界週航を精載す(第三)倫敦の生涯……航海後三年間の倫敦生活を記す(第四)ダウンの閑居……倫敦の塵埃と喧囂とを避けて片田舍に退き專心一意學術の研究に從事し有名なる種源論を始め數十の名著を發行し齡古稀を越へて尚鍥鑠四十年間一日の如くに勤勵し汲々として倦まず終に七十四歳の高齡に至つて逝去し國會の議決によりウエストミニスター寺院に國葬せらるゝ迄の事を記す(第五)人物……其高潔にして偉大なる品性を紹介し學者として大なりしダーウヰンは又人物として大なりしを論ぜり(第六)進化說……最も平易に最も通俗的に多くの例證を引きて始めてダーウヰンによりて遂に唱導せられ學術の進步に一大革新を與へたる進化說の大要を說明せり

此書は平易を旨とし議論を避けて事實を主とし以て廣く理學界の大王を世に紹介せんことを期するものなり

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

今世人物評傳叢書

『今世人物評傳叢書』は其名の之を示す如く、今世に於ける人物、即ち主として朝野知名の士を評し且傳するに在り。評傳叢書の批評は、民友社獨特の筆鋒を以てし、苟も褒せず、苟も貶せず、若し夫れ叢書に上る人物の叙次に至りては、筆者の批評眼の映ずる所、傳記材料の熟する所に從ひ、之を傳するのみ、毫も人物の大小高下に關することなし。彼等生存の今日に在りて、敢て其傳記を公にす。是れ殆んど要なきが如し。然も說あり。試みに明治元老、即ち今日に在りても、世人の一部が尚ほ推尊措かざる、所謂功臣者流を見よ。彼等が前半生、即ち維新風雲の會に於ての前半生と、其の後半生即ち現今の境遇を比し、果して同身非同身の感なき能はざる乎。能く謀り、能く斷じ、能く行ふたる青壯時代の彼等は、變じて優柔無斷惰氣彌漫の人物と化し了せり。評傳叢書若し此時弊を療するに力あらば、則ち筆者の今世に於て、今世の人を傳するの素志遂せん。

第一冊 山縣有朋

定價 十五錢　郵稅 四錢

附 渡邊國武、岡本柳之助

狂介の時代を讀み、萩原の時代を讀み、西鄉對談を讀み、兵制革新を讀み、而して明治廿年後の有朋山縣伯、或は侯を讀め。其痛惜浩嘆せざるもの果して幾人かある。侯の名は尙衰へず。今後も尙ほ其名を聞くを戢せざるべし。其實に至りては如何、其力に至りては如何、吾人豈に深く之を絮說せんや。乞ふ一本を取りて之を讀め。

批評

●朝日　今世人物評傳叢書一冊として先づ山縣有朋次に渡邊國武岡本柳之助を附錄し筆に任せて縱横其人を評論す其言の當否は知らざれども近來傳記の流行する時に當り是等の書亦世人の歡迎を受くるものならん

●萬朝　傳記書の世に持て囃さるゝ期に乘じて慧敏なる民友社は前人を傳ふる陳腐を去て今代の人物評論を試み、其一卷として此の「山縣有朋」一本出づ、文は平生の民友社流に似ず實を多くして華を避けたりこれ一變調なり

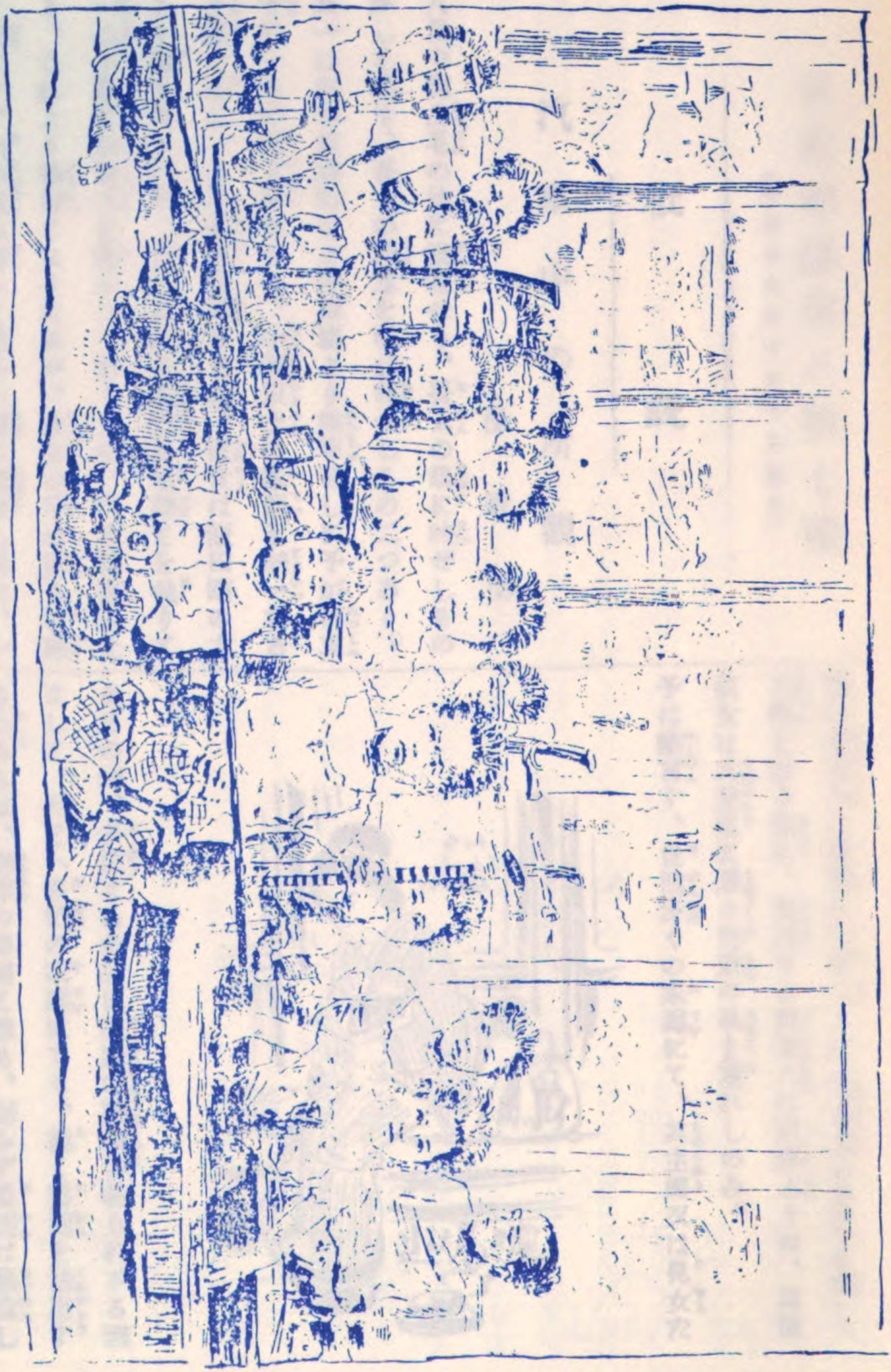
●大坂每日　事實と評論とを交へて簡明流暢に叙述し去り讀者をして面白からしむ眞に評傳の名に背かず而して之に附するに一錢一厘大臣たりし渡邊國武の失敗的公生涯、其外貌に似ず詩文に長じ圓轉滑脫の敏材あり絲竹歌曲のことを解せざるなきを渡邊國武の私生涯、及び朝鮮屋岡本柳之助の過去現在を評傳したるものを以てす

發兌元　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

明治廿九年十月十日發行

家庭雜誌第八拾七號

目錄



家庭雜誌第八拾七號
（明治廿九年十月十日發兌）

社説

汽車中の所觀

漫遊生

八月中旬上毛の地に漫遊せり、吾人の眼に映ぜしもの多しと雖も、吾人の注意を喚び起せしもの二つあり。其一は四谷信濃町なる停車場より乘車せしに予が列車中に一人の婦人客ありき、中等以上の家庭を統一する主婦と見え一人の愛兒を携さえぬ、彼女は飯田町の方より乘りたるにや、手に二本の編針と毛絲とを執りて一心不亂に銀貨入を編みつゝありしが、汽車新宿に止り、これより乘替となりたるが、彼女の手は倚も毛絲を放たず、汽車進み進みて熊谷の驛に着せし時は、一個の銀貨入は美事に出來上りぬ、同乘客が煙草を喫し、冗語を語る間に、實用なる銀貨入は出來上りぬ、其間彼女は其愛兒に屢々慈愛の眼を垂れしのみ。予は斷言す、世間多くの家庭にて、其主婦又は兒女たるものが、多忙なるが故に家庭的職業の執られざる理なしと、たとへ多忙の家庭にても、能く時間を活用する心あらば、零碎の時間と雖も、必らず時間は節儉し



得られ活用し得らるゝなり、零碎の時間を活用し能はざるものは、たとへ十分の時間ありとも、到底時間を死物として了るなり。

予が注意を惹きし第二は、歸途上州前橋より下等列車に搭じたるに、高崎驛に至りし時、無數、無量の乘客續々と入り込み殆ど立錐の餘地なきまでに至れり、其乘客を點撿すれば、七八歳より妙齡、中年、老年の婦人、素より田舍の風俗なり、而して一列車に幾十人か數知れず、中に一二人の男子附添へり。

予は餘りの事に驚き、就て此事情を聞けば、此近邊の農家の兒女、夏期の養蠶を終り、得たる金もて東京見物に出かくるものなりと、宜なるかな、少女の顏も老婦の顏も欣々然たるなり、此は予が上州地方を漫遊中至る所に目擊せし、農家商家の店頭に座繰に勤勉なる婦人なり、予は此地方の婦人が勤勉の後に娯樂の良習慣あるを以て、都人の家庭に實行せんことを切望して止まざる也

多言と虚言は從兄弟　（獨乙俗諺）

實談

りんこるんが妻（上）

其村子

奴隷の父と敬まひ、又は自由の父と尊とび、詩に作り歌に咏じて、令名令譽いよ〳〵高く、藉々として今に相傳ふ亞米利加合衆國の大統領アブラハム、リンコルンとは抑いかなる家に生れ、如何なる教育をうけ、如何なる經歷を重ねたるの人ぞ、史籍我等に告ていふ、渠は貧者中の貧者ともいふべき其日暮し、恒産一もなき讀も書も能はざるの勞働者を父として、我が國の百軒長屋ともいふべき家に生れたり、唯渠が身に取りて

此上もなき幸は其母なる人の世にもすぐれて賢こかりし一事にして、是ぞ渠が傳記中特筆大書もつとも注意すべきの點なり、物の心をわきまへしよりは晝夜此母の教によりて、讀書はいふもおろか、行儀作法に至るまで、漸解するに至りたり、それより父の忌を强てすゝめ鄕里の小學校に入たりしも全たく母の力なり、此母にしてながくも渠を養育しなば充分の指導も教訓も受べかりしに天無情なるかな、悲しきかな、渠の通學やうやく十一ヶ月の日子を重ねし時に於て慈心いともふかき賢母は彼女が最愛の兒を捨て逝けり。

賢母三寸の呼吸と共にアブが通學の途もきれ果て、空しくも初等教育の機を失せり、故に渠が教育の礎といふべきは僅に右の十一ヶ月、これぞ渠が正當に受し教育の凡てなり、此十一ヶ月を除きて外には一日はおろか半時とてもあらざるなり、然して此十一ヶ月の教育こそ世になき母の賜なり、渠がふかくも其恩に感じて永年一日も忘るゝことなく、其大統領となりし日に於ても、余が位置も希望も將た將來の事業も皆慈愛いとも深かりし余が母、片時も余が記臆より去りやらぬ天使の如き余が母の賜なりと語りしも、元より然あるべき事なり、(或人余に語りていへらく、およそ世間の母なる人は膝を机とし、前懸を塗板ぞとも心得てそが幼子を教ゆべし、即ち己が一身やがて學校なりといふことを忘るべからず、世にも母の所業ほど幼子にうつりやすきものはなし、古來賢者を父とせる愚物は男女ともに珍らしからねども、才女を母とせる鈍物は殆んど稀なり、早い證據が外國人を父とし日本人を母とせる所謂あいの子なるものに賢こきものありやなしや、よく〳〵思ひ合すべし、これ父こそはさる愚物ならざるも母こそ皆いふにたらざる、否いふに忍びざるものかつて教育なんどをうけし事なき、いはゞ人間の屑ともいふべき者の多きによるなりと、今此傳を草するに當

りて端なくもこの事に思ひ及ぼし、かくは註してこゝに記入す、讀む人心して見たまへ、長きは老の繰言なり、用なしとゝがめたまひそ》

古來巨人傑士の草茅の裡より出でしは一々あげて數ふべからず、されどもリンコルンの如きは甚だ稀なり、或人のいひしが如く渠が一生は誠に生ける自助傳なり、一々に記しもてゆけば長かるべきも、茲にはもとより之を許すべき餘白もなく且又余が本來は其妻君を紹介せんとするにあれば、くわしくはそをいはざるべし、讀者渠が一代を知らんと欲せば、他に多く其書あり、ついて見るべし。

上述の如き順序を經て人となれるリンコルンにいたくも未來の望を屬し、これこそは必ずや世に名をなすべき人なりと注意の視點をとゞめしは渠が故舊の友にもあらず、或は緣邊の人にもあらず、ケンタッキー洲なるレキシントン市の人、ロベート、トッドが娘なるメリー、トッド即ち後の大統領リンコルン夫人其人なり。

異と評すべきか、奇といふべきか、いまだ幼かりし日より常に自からが未來の運命を知り、恰も其掌を見るが如く明らかにしてよどみなく、次の年はかくかくあるべく、又次の年のかくあるべし、然して遂には必らず大統領なる人に配し、白舍の裡に於て萬衆に敬まひかしつかるべしと、逢ふ人ごとに語りしとぞ、《世に神童といふものありとつたふ、然らばこのメリーこそ神童とも神女ともいふべけれ》

十九歳の春よりは父母の膝下を離れて、スプリングフイルドといへる地に行き、こゝに其姉なる人の嫁げる家に同居せり。

容貌いとも美くしくかつ其才の世に優れて萬に一の脱目なく、所謂如才なきとりなしは、早くも多數青年の注意をひき、夙に交際場裡の花とあほがれ、行さきさきにて持囃され、求婚の申込も日を追て多くなりまさ

り行に至れり、されど始にもいひしが如く必ずや大統領なる人に配せんといふ自信は彈指一瞬の間も其心頭を去らず、いづれも〱其大望を果すに足るべき器ならずとて、一も納る處なかりしを尤も誠意誠心を以て申込みし一人ステフン、ドーグラスこそは慥に其人なるべしと、やゝ其心を傾けたりしに、奇なるかな、彼女の特有なる一種不可思儀の神智は决してさにあらずとぞ告げたりけり、茲に於て又々心を飜へし更に注意を他にむけし時しもあれ、大膽にも申込をなせし人こそ、即ちアブラハム、リンコルンなり。

リンコルンは此時すでに三十二歳にして代言の職に從事せり、されどもいまだ信用少なく、從がつて收入とても左程多からざりしかば、漸くにして其日々々を送りしのみ、更に餘裕とてもなく、貯蓄とてもなく、多くの里數隔たりたる都市へも徒歩にて往來するが如き有樣なりし。加之のみならず、其容貌とて甚だあがらず、寧ろ醜夫ともいふべき程なれば、殆んどいづれの點より見るも優に彼女の愛を買ふべき資格なし、然るに一も屈することなく引手あまたのメリー、トッドに其結婚を求めしこそ、余が大膽といひしに於て諸子よ異議はあらざるべし。

然るに一見舊の如く、これこそはわれを白舍に伴なふ人ぞといたくも信じて疑がはず、暖かき笑を以てこれを諾し、日ならず一の滞りなく、花の如き美人は岩の如き醜夫に配せり。

數多き求婚の失敗者はいたくもこれをねたく思ひ、如何にもしてこを妨たげなんと待構へたるに最上のいひがゝりこそ與へられたれ、これぞリンコルンが一代の傳記中もつとも可笑逸事なり。

其頃メリーは何事に激してや、いたくも代言人の無氣力を嘆じ、一氣呵成罵詈冷笑の詩を草して八方彼等を嘲弄せり、これぞ日頃の恨をはらすよき手がゝりぞ

と、或心よからぬ者、そを版にをこして廣く頒布なせしかば、兎角理窟詰なる代言人どもいかでそを不問に附すべき、忽にして攻撃の聲處々より起り、何人の草にかゝるや我等其人にせまるべければとく／＼其名を告ぐべしと出版者にむかひせめかけたり、リンコルンは此事にいたくも驚き、如何にもして其難を救ひ、其最愛の人の身を助けんものと、自から名乗出でゝ攻撃の鋒に當り、草者こそ即ち余なり、此事に關する一切の責任は余に於て擔ふべければ如何ともなすべしといひしかば遂に决闘の申込とはなりにけり、唯々儀式のみなるべしと思ひなせるリンコルンは武器とても更に撰ばず、なみ／＼の劍を以て出逢べしと答へやがて時日場處までも定められしを或友人の仲裁によりて何事もなく濟みたりとぞ（後年に至り此一事人のいふが如く誠なりやとリンコルンにむかつて問ふ者ありしに渠は然りと答へ、さて余は兎も角も申込をなせし人の身の品位にさへもかゝはることなれば決して余が然いひしなどゝ他に語りたまふなとかたくも口どめせりと聞けり）

誠に種々の方面より見てリンコルンが當時の樣を評するに、左樣秀でたる處もなく、其然く多望なる身と見定めしは實に此夫人一人にして、ワシントン以來傳へ來りし米國大統領の系統中にやがて渠が名をならぶべしとは萬人のともに思はざりしところなり。

思はざりしところの事は一歩／＼と進み行き、彼女が神智の彼女につげし幽玄とも評すべき一種の不思儀はいよ／＼事實となれり。

時は西暦一千八百六十年なり、前大統領の任期滿ちて後者改選の日は來れり、リンコルンは同黨のシワルドと共に中原の鹿を爭さふ、例の如く合衆國の全躰暫は唯此事に狂奔して更に其他の事を知らず、勝敗の結果如何と群衆各所に相集まりてこれを待つ、リンコル

ン自からも亦晝夜新聞社に詰きりて去らず、如何に〳〵と思ひぐしつゝ百方力を盡して直接に間接に其事の爲に働らきしが、心勞空しからず遂によろこばしき報知は來れり、其報知と共に夫人の八方に奔走して非常なる助をなせりてふ事も傳へられたり。

其翌年の二月下旬、リンコルンは夫人及び夫人の姉妹其他一家の眷族をひきつれ、故鄕なるスプリングフィルドを引きあげてワシントン府（大統領官舍のあるところなり）に向ひたり、反對の人々黨をなしてまちかまへ、途中バルチモアの附近に於て、暗殺すべしとの風潮誰いふとなく巷に溢り、こは容易ならぬ事ともなりと警吏非常線を張りてこれを守り、かつ探偵の吏を發して百方あやしき跡を求め、猶々心やすからずとて夜中に臨時の汽車を仕立て衆人の思ひも染めぬ間に大統領を護送せり、されば人のいひしが如く大統領假裝して入府せず、汽車こそ假裝して入府なしけり。

茲に於て當年のミス、トッドが小さき胸に描きたりし大望はやゝ果されたり、彼女大統領なる人に伴なひ、白舍に入りて萬衆に敬まひかしづかるゝ身とはなれり。

これよりの內助それ如何、次號に於て完結すべし、讀者幸ひに倦怠の念を起すなかれ。

人厚密の時に當て盡く私密の事を以て之を語べからず、恐らくは一旦歡を失ひ前言口實さならん、歡を失ふの時に至て亦盡く切實の語を以て之に加ふべからず、恐らくは忿平に復せば前言愧つべきに至る。（願體集）

文藝

瀧の水（一）

春波生

瀨をはやみ岩にせかるゝ瀧川の
われてもすへにあはんとぞ思ふ　崇德院

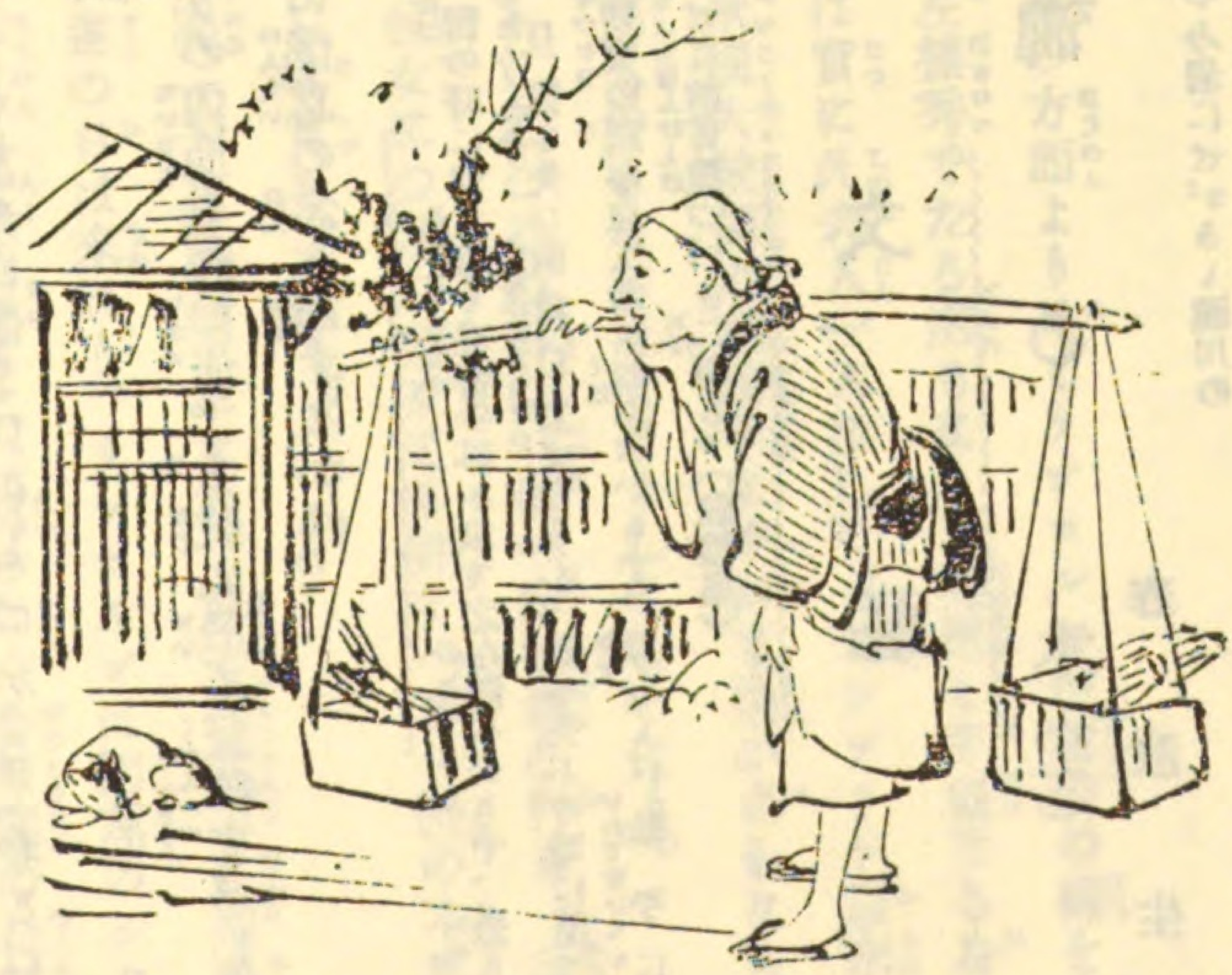
雨のふる日も風のふく日も扨は又雪に前後の別らぬ日

も、更らに〳〵かはることなく、刻限さへも誤またず、いつも〳〵同じ時分に、聲いと高く呼はりつゝ、根岸あたりを廻る納豆賣の老嫗がある、打見たるところたしかに五十六七八、やがて六十にも近きものでし、なみ〳〵なれば孫の世話佛いぢりに世をやすく〳〵と送るべき年頃なるに、いかなれば斯る仕儀、寒さ暑さに晒され、其程にもなきはした錢に、世の輕薄をならぶるとは、扨も〳〵憐の身の上、そも何人の果なるぞと、涙の露を注ぐ人さへ多しと聞く。

洗ひはげたる縞の着物に、半きれたる帶をしめ、尻はし折て草鞋をはき、古手拭をふりかぶり、蜜柑箱に繩をつけたるものをあとさきに、細き天秤棒にてかつぎ、例の如く常住の華主塲、御院殿の方から篠の雪のあたり、一圓にのこらず廻り終りて、今しも中根岸から下根岸の方へ行かうとする處である、御行の松の前を音無瀬川の流に沿ふて下へ出で、右へまわつて角から二軒目、裏の切丘をわけて、

『納豆屋さん〳〵』

呼びとめたのは、下女のお金とて房州那古近在のうまれ、世に珍らしき衛生的の美人、年は十八にして目方十八貫目少しもきれず、ふくべにしたれば目瓢とて中々金になる至極最上の代呂



物である。

『へイ〱、毎度ありがたう』

荷を卸して二つも三つも御辭誼をなし、後の箱から取出したつとつゝみを二つ渡し、請取た二錢の銅貨を叮嚀に懐の財布に納め、擔ぎあげて初のごとく

『納豆ー〱』

五足六足、十足も歩んで又もやまがる曲角にて、出逢頭に出逢ふたのは三十前後洋服出立の男である、すり違へてさきへ行く納豆賣の後姿をふりかへり見て不思儀さうにながめて居たが、思ひあたる處があつてか、急に足を早めてあとを追つかけ、

『おばさんじやありませんか、モシ、金岡のおばさんじやありませんか』

聲の下に納豆賣は

『へエー』

答ふると同時、ひたと足を踏み止めたりしが、

『イ、エ、違ひます、存じません』

言ひ捨てゝ直ぐ其まゝ、賣聲さへも揚げずして急ぎ足に、寧ろ逃げるが如くに行かうとする、此方の男も亦足を早めて、

『御かくしなさるに及びません、モシ、叔母さん、私しです』

馳せついて天秤棒の端をつかまへ、

『芳太郎です、内海です』

かくも荷ぐるみに引とめられて、如何ともするに由なく、

『芳さん、誠に面目ない』

詞より先だつ涙を袖にてぬぐひ、

『ほんに穴へも入りたき心地、誰方にも沙汰なしに、此まゝやつて下さい』

又々荷をかつぎあげんとするを、

『ナニ、面目ないも何もありません、實に御逢まうし

てうれしいです』

猶々しつかと荷を押へて、

『話したいこと、聞きたい事、何分にも此處は往來ですから』

無理に引たてゝ其横町にある、正一位何とやらいふ小さき稲荷の社へつれゆき、納豆の荷は石燈籠と高麗狗との間にすへ置き、拜殿の椽先、賽錢箱の傍に兩人腰うちかけて語らふ躰態、洋服の若者に納豆賣の老嫗、知らざる人は何と見る、誠に妙なとりあはせ芝居の狂言にでもありさうなことである。

内海はかくしから紙巻の煙草を取出し、マチツを磨つて火をうつし一ふかし烟をふいてさていふやう、

『何から御話まうさうやら、實に〱それは〱』

愁然とするは流石久しき馴染甲斐世に難有心である。

『まづ何よりきゝたきは、叔父さんは御達者ですか』

『一昨年なくなりました、暮の二十日に』

いひながら袖にて又々涙をぬぐふ、

『さうですか、それは誠に』

溜息をつき、ハンケチにて鼻をかみ、煙草の灰をはたき落して、

『お殘多い事、御愁……

其尾について納豆賣は

『ナァニ芳さん、こんなことといふてひどい奴と思ひなさるか知らないが』

『死んでもらつて、私し初めお峯までが浮かんだのです』

『成程』

いつたまゝ何をもいはない、いふてよいか、又よくないか、それは元より其筈である、

『そしてこんなに……失禮ですが……落ぶれなすつたのは』

『中々はなせば長いことです、みんな死んだ人の』
悔しい樣な、殘念な樣な、そして耻かしい樣な、いふにいはれぬ素振、前の事、常の事をよくも知つたる芳太郎は萬事飮込だる承知の面持、
『又例の一件を、おはじめなすつたのですか』
問ふにつらさの耻づかしさ、
『ダウモチー、思ふ樣に行かないからつて、一層地道なことがいやになつて、家も藏も道具一式も皆賣拂ひ、遂には自分の命までサ、お峯だけは私しがないて〳〵やつと引とめましたの、實に芳さん私しや毎朝、かきがら町の方をにらんでやりますのよ』
涙におのづから聲ふるひわなゝひて詞の調子とゝなはねば、終りの程は何をいふやらひとつ〳〵あきらかには別りかぬる、
『して今は何處においでゝす』
目の前の情にせまりては、問ふ聲も亦おのづから震ひわなゝく、
『大音寺前におります、三木屋といふ大家の長家をかりて』
『ヲヤ、さうですか、大音寺前、吉原の近くで、賑やかでいゝですね』
意味もなき笑をなせば、納豆賣も亦つれられて打わらふ、
『そしてアノお峯さんは、何處へも』
『ヘイ、其後方々から口がかゝりましたけれども、まだ何處へも』
『それでは小島から御かへりになつたまゝ』
『さうです、それにかう落ぶれてはとても〳〵とあきらめまして
愈々ます〳〵涙ぐんで、
『毎日々々賃仕事しております』
『小島の風評をちとおきゝになりましたか』

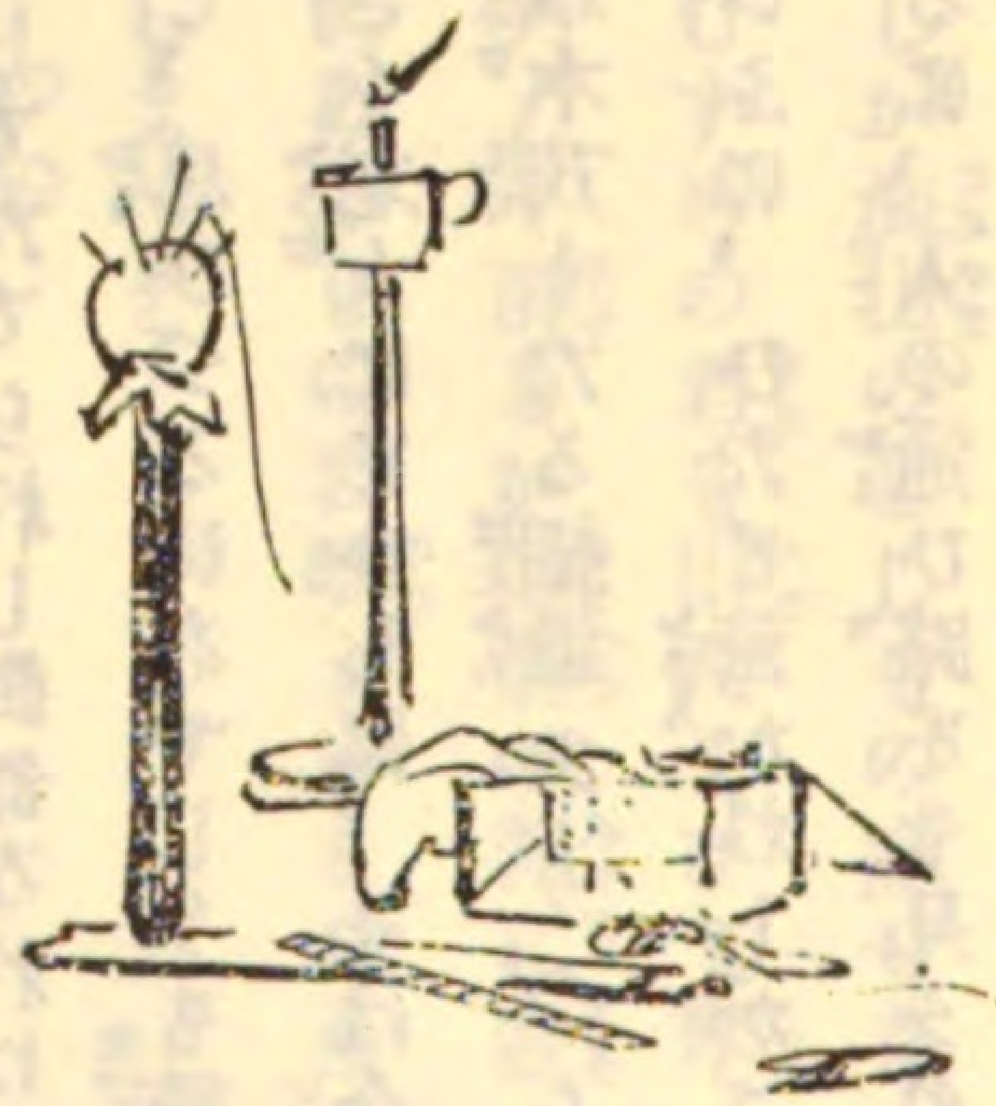
『イヽエ、少しもきゝません、ほんにお峯も小島に居ましたら仕合せでしたものを………
『小島も其後は色々様々な事を仕ましたが、到々家を弟に呉れて、今は西京に居ります』
『西京、へー、何をして』
『何といふ事もなくたゞぶら〳〵として』
『まだおかみさんも貰はないで』
『さうです、我々がいくら勧めても、一時は坊主になるなんかいつて騒いたです』
『なぜでしやうねー』
いふ聲何故にや低くして實に詞に力がない、ハテなぜでしやうか、
『それはその何です』
是も亦不思儀なる返答、更にわけが別らない、然し二人には充分別りきつたことゝ見へる、
『親の心得ちがへにて、飛んだ良き縁をこわしました、あのまゝ續いて居りましたら、今頃は孫の二人も』
『さうですとも、全躰だういふ譯で御ひきとりになりましたのです、それが實に不審です』
問るゝにそれと打あけて答へんよしもなき父親観次郎の心得違、又しても〳〵相場の資本にとて引もきらぬ無心の狀、所謂佛の顔も三度とやら、ヲイそれと返事のなきは理の當然況てやまだ親かゝりの身の心にも任かせざる金の算段、埒あかずとて娘をひきとり萬が一間違ば泥水の淵にも沈めん下心、見さげ果てたる心底とは、かつて小島の母がお峯の荷物を送りかへした其あくる日、内海芳太郎に話したところ、よもやと其時の疑ひも成程今の話では事の實在、寸分も違ひはない、たとひ我身のさらずともつながる身の心に耻ちてついこう〳〵こういふ譯で引とりましたとも答られぬは誠に以て然るべきことである、然今の話の中にお峯だけ

はわたしが泣いて〳〵引とめましたといひ、其後はまだどこへもといひしこそ、少しは心を得たることである、小島のいやに厭世家めいたことをなすも實は此恨より來りしこと、品によつたら破鏡再び……と些さか心をおちつけて、

『事によればお峯さんは』

『へー、何です』

『イヤサ、斯御目にかゝる上は、及ばずながら萬事お力になりませう』



いひながらかくしの内より紙入を取出し、三枚の札を紙にひねつてこれを差出し、

『誠に失禮ですが、これはほんの私の心、何なと御氣にめしたものを』

『イエ、だう致しまして』

つきかへすを又々差出し、

『だうか納めて置て下さい、それに猶々御相談もあり方々致ますから、いづれ其内、遲くも四五日の内にうかゞひます』

『誠にいたみ入ります、それでは』

立上りて尻のちりを拂ふ、納豆賣も亦立上り、

『だうか納めて置て……お峯さんにもよろしく〳〵』

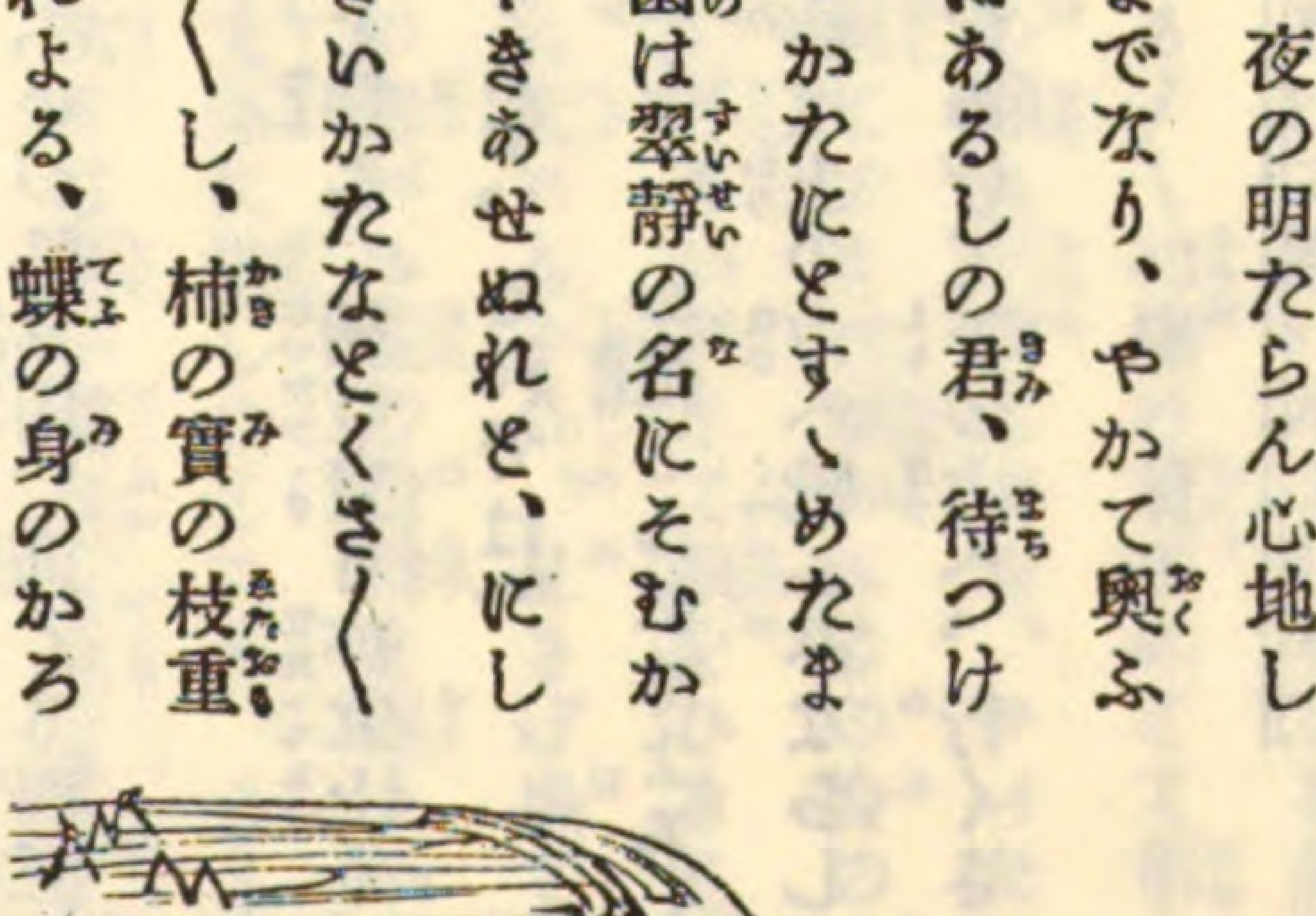
兩人別れ〳〵、内海は上の方へ靴ふみならし、納豆賣は力なげに荷を擔ぎあげて下の方へ、行くさきははてだうなるか。

翠靜園の記

桐 廼 舍

遠近にあふれたりし水も、やゝ引ぬと聞て嬉しきまゝに、おのづから心も空も晴わたりぬる日、かねてこひ

つゝありし翠靜園の秋のけしき見はやと、例の女のわらはゐて出ぬ、紅葉はいまた染あへぬとあや錦きそひたる人の行かふさま織か如、こは日曜のゆゑとはいへ秋を愛しとは誰かいふらむと、いふかしみつゝ擣衣うつ音羽の里もとく過て、關口の臺にいたりつきぬ、翠靜園はさる司人の、好を盡してたてられし御舘なれは、さまことにゆかしからむと、思ひつるにあやしうも尋わひぬれは、果物なとひさく老女にとひしに、そは今來ませる道のかたへに、草木茂りたる細道ありつらむ、そを分登りたまへといふに、ひたと驚かれしかさはとて、立もとりつゝ見るに、人の通ひ路とも見えぬは、猶あやふみつゝ分いるに、小徑の露は雨より志けく晝もいとをくらくて、大樹の梢には山鳩の聲豊に聞ゆるも、中〱に物すごし、河原の院にかくれたまへる夕貌の上の昔もかくやと志のはるゝに、ゐて來しめのわらはいたくをぢて、爰にはわらしいかてかゝる奥に住たまふ人あらむや、なと、いふわれもさは思へと志ひて、强氣によそほひておぼつかなくもすゝみ行しに、船板もてめくらしたる一搆ありけり爰なんめりと、嬉しくてあなひこひしに實にたかはざりけり、門の内にいればさなから、夜の明たらん心地して日影まはゆきまでなり、やかて奥ふかう伴なはれしにあるしの君、待つけたまひて眺よきかたにとすゝめたまふ、まことや此園は翠靜の名にそむかで、七種の色はやきあはせぬれと、にしき木ゑにしたなきいかたなとくさ〱しるさむもくた〱し、柿の實の枝重けなるにたはれよる、蝶の身のかろけなるは春の花かとも見ゆ、夏におくれし蟬の音時知り貌に、鳴蜩の聲もあはれにをかし、はるかあなたを望めは雲の如きの見ゆる白帆は、品川の沖をかよふ



なりけり、あるしの君は、をしきにもりたる栗の實をさして、こは庭にこほれたるものよ、とくたうへよと笑ひたまふ、我も好めるものからうちゑまれつゝ

すゝむるもうくるもゑみのこほれ栗
　秋はこのみにしくものぞなき

とて山猿とそなれる、いつしか海山のをしもの處せきまでいつるとゝもに、まなむすめの君も出たまひて琴かいならしたまふに、知らず〳〵醉るか如龍の都に遊へるかと、思ひまとふほとにあるしの君歌よめとせめたまへは、我にもあらて見しまゝを

　色はまたそれと見えねど錦木の
　　名にこそ匂へ秋のなかめは

　憂秋とおもふこゝろもなきいかた
　　さしてやすらに世を渡らはや

　ゑにしたにかれすてあらは千代かけて
　　御園の秋をとはむとそおもふ

なと口すさひつゝありしかかへさに霧の立ぬ間にとて、またとちきりてまか出しも猶心のひかるゝにかへり見かてに

　心にはいまもかよへり軒端なる
　　松吹風も琴のしらへも

笛

齋藤溪舟

予の故鄕は岩手縣の盛岡市である。

予は屢々函館と東京の間を往來したが、汽車が其の盛岡を過ぎる度毎に、予は實にたゞ何となく淚が溢れ流れるやうの心地がして、南部片富士と異稱のある岩手山の頂頭が、狂瀾怒濤のやうに起伏して居る群山の間から看えそめて、それが漸々大きくなつて、果ては威嚴ある大人が大廣間の眞央に座つたかのやうに、中天遙かに屹と聳峙えて、藪莉島の松林をうね〳〵と腰に

ひき廻して、それから北上川の汪洋たる流に倒さに寫つて、到頭杉の森、松の林の間に沒し去るまで、予は車窓からして首を引つこめた事はない。

斯まで慕かしい戀しい、山紫水明の我が故郷に背くと五年、予が十九の秋、漸とのことで盛岡に遊ぶとが能た。

而して三日ほど滯在して、翌朝はいよ／＼この名殘惜しい盛岡に訣別せねばならぬといふ前の晩であつた、予は月明に乘じ小舟に棹さして、明治橋の下から北上川の長江を下つた。

左岸に長く連なつて居る、杉並木の上から玉玲瓏とした氷輪が、天女が今予のためにわざ／＼磨き上げて呉たかの樣に冴え渡つて徐々と昇る、並木の影が川の面に落ちて、漣波が晃々と動くやうな走るやうな、詩人が所謂千條の金蛇とは蓋しこれを形容したのであらう。

流にまかせて予が一葉の舟はます／＼下つた、すると何所ともなく嚠喨と澄みかへつた玉笛の音が、下流から徐ろに吹く川風に送られて、水の面を滑らかに辷つて來る、それが實に其の音が抑揚波瀾に富んで、神微に入るの妙があるから、今や天心に朝せんとしつゝ、ある月も、何んとなくこの笛に吹き昇げられるやうの心地がして、予は艫に佇つたまゝ、霎時恍惚と聽きとれて居た。

舟はます／＼下つた、玉笛の音はます／＼近くなつた。一心に耳を傾けて居た無我の予は、沈默の間に於てこの玉笛の音の發所を探つて見た、すると左の岸に據つて四五軒の茅屋がある、美妙の響は慥かに其の邊からして飛んで來るらしい。

予は何となく其の笛の主を視たい心地がした。それは斯る清風明月の夜に、獨り茅屋の裏に兀座して、斯る微妙の音を弄ぶの人が、何んなにか古への隱君子を偲

ばせる風彩をして居るかを想はしめたからである。
予は舟を繰操つて、川の岸邊に舟を寄せて見ると、慥かに二軒目の茅屋から玉笛の音が響いて居るが、その吹いて居る主は誰であるかを視るとが能ない。
予は本意ないながら其のまゝ歸つて、翌朝は青森行の汽車に乘じた。
其後も予はこの玉笛の音を忘れるとができず、盛岡を過る度毎には、必然と明治橋の下から北上川を下つて見るとに決めたが、月の好い晩なら必ずその玉笛の音を聽かぬ事がなかつた。然しつひぞ玉笛の主といふのを見たとがない。
去年の秋も予は盛岡を過ぎた、而もこの夜は中秋の月見の晩である。予はこの月明に乘じて例の如く北上川の流を下ると、瀏喨たる玉笛の音が例の如く冴えて聽えて、徐々と月を吹き上すと又例の如くである。予は備さにこれを聽いて心神の塵埃を淨め去るべく、折よくばその玉笛の主の風彩をも併せ見るべく心得て、舟を其方に進めながら、漸く岸に近づいた。すると例ならば家の内からして響いて居た筈の玉笛の音が、今夜は岸の上に跪くまつた松の蔭から響いて居る。
今こそは玉笛の主にも接するとが能得べく、予は嬉ばしさの餘、岸近く舟をよせて佶と彼方を仰見た。玉笛の主は慥かに松の幹に凭れて餘念なく笛を奏でゝ居る。
あゝ實に人外境だ!、別仙界だ!、この清風明月、この玉笛參差、まあ何んたる高雅、何んたる幽趣の極であろう、と予は殆んど予のある事を忘れて、魂魄霎時飄乎として五躰を脱けてしまつて、灩瀲たるこの水光に乘つて、月宮遙かに飛び昇つたかの様な心地がした。
すると忽地玉笛の音がハタと止んで、予の魂魄が飄々乎として復た予に返ると共に、松の小蔭の玉笛の主が

此方をさしてスタ〳〵歩んで來て、岸の上から物珍らしさうに予が小舟を俯視て居る。

予もまた曾て古への隠君子とまで想像して居る玉笛の主が、果して何な人であらうかと仰見ると、豈計らん、漸々十二三にもならうかと思はれる頭髪の毛の額口まで蔽さつた、筒袖に似た衣物を脛も現はに着た、そして大きい草履を穿いた小童である。



玉笛を吹くのは汝かと予は言をかけた。小童はたゞ頤を領首かせて居る。美妙ものだ、自分は實に感服して毎年此所へ聽に來るが、誰に習つて其樣妙手になつたのかと聞くと、俺あ好で獨で妙手になつた、と渠は最も無造作に答へた。

予は渠の玉笛を借りて視た、實にもう手擦のした、漆膠の半ば禿げ落ちた粗末至極な笛である。予は能ないながらも歌口をしめして、然るべくフッ〳〵と一と息二た息吹いて見たが、皆目音が出ない。眞で空壜の口を吹くかの樣で、一向無効であつた。斯樣もので何してこの明月を吹き昇げるとが能るのか、と予は一としほ感服に得堪ぬ。

汝はこれを平日に何んな大事にかけて秘つておくかと訊ねると、戸棚の隅へ入れておくのだと答へた。それは善くない、大事な玉笛は紅絹か緬紗の袋へ入れて置くのが眞當だ、幸ひ此所に緬紗の風呂敷がある、これを汝に遣るから、これで袋を製作へて入れておくが宜い、と予は物を包んである風呂敷を取つて、更に玉笛

を包んで岸の上なる渠に手渡した。すると渠は急いで家に駈けこんだが、間もなく其の子の母親が出て來て、種々禮を言つたが、予は茹た栗の實と枝豆を貰つて歸つた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

今年の中秋にも予は恰度盛岡を過ぎた、例に由つて扁舟月を載せて北上川を下つた、然し行けど行けど嘗て玉笛の音が聽えない。予は不審に思ひながら川の岸に舟を繋いで、渠が家の前を往きつ復りつして見ても、小さな窓からはほの明るく燈火の影がさして居ながら、内は寂莫として人の居る氣はいもせない。予は何んとなく心細いやうな、張合がないやうな氣がして、遂に戸口に佇て案内を乞ふた。

誰も居らぬであらうと思ふたが、矢張居つたのである。誰方、と出で來たのは母親であつた、予の顏を訝しげに熟々と視つめて何御用であるのかと訊ねた。予は去年笛を聽きに來て、栗と枝豆を貰つて行つた男であるが、小童衆が何したと問ふた。母親は予を無言で圍爐裏の側に請じて、而して戸棚の隅から、例の緶紗袋に入れた玉笛を取出して予の手に渡して、悄然と背後の佛壇を指さし示した。予は思はず全身の血がムラ〳〵と頭腦に逆上つた樣な心地がして、凝視と渠の俯向く顏を視て居ると、落涙潸々、雨の如くに降つて、ハラ〳〵と膝の上におちて居る。（完）

談叢

淺間山の大噴火

今年は海嘯があり、地震があり、二度も三度も大水がありまして、被害地方の人々の難義は申すもおろか、實に氣の毒の至りて御座います。

海嘯地方や地震地方の事は、新聞などにて御存じの通

り、水害も餘り度々の事故、哀なる事も聞きなれて、強く人々の注意を惹くに至らぬやうですが、現に美濃尾張地方を始め水害の爲め焚出しを受けておるものが二十萬人もあるとの噂、日清戰爭の時總出の人數ほどで驚くべき事ではありませんか。

斯う申せば何とやら御幣をかつぐやうで御座いますが、近世の大饑饉と申せば、天保七年の大饑饉、其前のは天明四年の大饑饉です、そして天保の大饑饉は今より六十一年前、丁度丙申の年で、今年廿九年はそれより六十一年目にて矢張り丙申に方ります。この天保の饑饉は今も年寄りは皆記憶しております所で、大坂で名高い大鹽平八郎の騷動を起したのも此時の事で御座います。

又天明の饑饉は今より百十三前で、天保よりももつとひどかつたとか申し傳へます。

天明の饑饉は天明四年の事で、則ち天明三年淺間山の大噴火があつた次の年です。つまり前年よりの天災不時候が四年の饑饉となつたので御座ります。

此程其淺間燒けの事を其時記錄したものが、被害地方の人の家に殘つておりましたのを見ましたが、今其一斑を抄記すればあらまし下の如くで御座ります。

何人も知る通り、淺間山は上州と信州との境にあつて、業平の中將が『信濃なる淺間が嶽に立つ煙り』と詠んだ昔から、今もかはらず煙を噴ておりまして、天明の時は東の方へ噴き出したので御坐います。

東の方は則ち上州で、麓が大きい原となつております。昔源賴朝が淺間狩をしたのは實に此邊で、今も其跡と言ひ傳へて所々に當時の記憶を存しております。

そして吾妻川の上流が其傍を流れて、山の間を東し又南して、利根川の上流中大きいもの丶一つとなつて居ること、地理書などで人の知る通りで御座います。

頃は天明三年の四月で江戸の十代將軍家治の世、田沼

立番頭の政治が荒みに荒んだ時で御座いましたが、九日の日から焼け出し、それより毎日砂灰を降らし、七月の三日四日は殊に甚しく、信州輕井澤、碓氷嶺、上州坂本、松井田、安中、高崎それより武州兒玉郡榛澤郡など三十餘里の中は砂灰二尺若くは三尺も降り積み、碓氷笹子嶺は五尺六寸積りて、人馬の通行止まり、中仙道を上下する參勤の大小名は甲州を廻つたといふ事で御座います。又輕井澤で焼石が降りまして、火事が始まり三十餘戸焼け、碓氷嶺の神主の家は十四戸程灰が積つて壓潰されたといふ有様。それで御座いますから近傍の村々山々の草木田畑は、灰と砂にて皆冬山のやうに又冬枯の野の樣になりました。

それから四日の晩に、數千百丈とも知らぬ高さに眞赤に焼けた石やら火やら噴上げたと見る間に、火の子焼け石は霰の樣に降り、其煙の先々は皆石が降つたといふ事です。其すさまじさは言ふばかりもなかりしとの事。

五日の晩の八つ半時分には、一道の黒雲がおしだして寅卯の方向に徐々として風に從ひ去りましたが、其中に直徑一丈餘とも見へる眞赤に光つたものがあつたといふので、此時代の事ですから、これは天魔外道の業であらふと申して、鐵砲など打掛けたと申します。

この四日五日は、上州碓氷郡群馬郡より武州榛澤郡兒玉郡邊まで暗夜のやうで、家々行燈などとぼし、道行く人は皆提灯を持て歩きました。其心細さ、此世の終りかと人々念佛など申したとの事です。

翌六日の朝は關八州は申すに及ばず、信州、越後、越中、能登、出羽、奥州まで白い毛が降りました、大約三寸、五寸所によりては一尺餘も降りました。

七日八日は別して鳴動が甚しく大地が地震のやうに動き、戸障子などぐわら〲鳴り響きまして、此日三度山より北の石泊り（昔噴出した時焼石の流れ止まりた

る所）まで燒出しました。併し麓の野の一端にある上州吾妻郡鎌原村（これが山に一番近い村です）では昔燒出した時の石泊りがあるから、たとへ燒出しても村まで押して來る氣遣はないと思ひ、唯火の子や石の降る事を心配致し、銘々土藏や岩穴などへ遁込んで居りました。

其日の暮方より此の淺間山から上州信州の山々へ黑雲即ち烟がたなびき、中に光り物即ち燃燒物が飛びました。或は天狗の所爲にやとも申して、祭禮などした村もあつたとの事です。

山の近傍の村々にては燒出す前に、井戶の水が悉く涸れた故これは不思議と皆々申したと言傳へました。

又八日の朝よりの鳴動は非常に劇しくなりまして、草も木も大風の吹き來つたかのやうに搖れ渡り、神佛の石堂まで搖り崩します故、人心慘憺として皆辻堂などに集ひ狂氣のやうに念佛を申し、あらゆる神に祈誓し、鐘の聲、大皷の音、山の鳴響に交りつ、何ともいへぬ有樣であつたとの事。想ひやるさへ、身の毛もよだつ計りです。

其中に俄然天地も崩るゝかと思ふ程の鳴動と共に、天を貫ぬく計りなる火の柱が山の頂上に突つ立つて、あはや倒れたと見る間に、最早世は常闇となつて、眞黑雲が捲くり來り、家となく村となく、森となく林となく、幾百年とも知らぬ大木老樹も皆押碎かれ、熱泥火石押來り、火花散り、黑烟卷き返り、田畑村落悉く泥海となり、人畜の死傷も數知れず熱泥は鎌原村は申すまでもなく近傍の聚落を押し流し、吾妻川に盈ち、家のこわれや大木など利根川へ押し流しました。

近傍の村落は田畑燒け泥に埋み、其深さ五尺七尺或は一丈餘の所もあつて、其泥の中で燒石が其後三十日計りも燒けて居つたとの事です。

乃ち吾妻川の川筋なる吾妻群馬の二郡は大害を蒙り、

親は子を失ひ夫は妻を失ひ、其むごたらしき有様は筆にも口にも述やうなく、久しき後まで生き殘つたものは、毎日追善とか、供養とか、施餓鬼とか、こゝにもかしこにも泣聲聞こゑ、何共哀れな事であつたと申ます。

其被害の村は、上州吾妻郡群馬郡にて

大笹村、少々の荒れ。大前村、流家百戸、死者三十四人、馬八頭。赤羽根村。鎌原村、全村流失、死者四百八十四人。西久保、流家廿一戸、死者四十二人。中井村、流家十六戸、死者三十六人。芦生田村、全村流失、死者廿三人。羽根尾村、流家五十一戸、死者廿人、馬九頭。今井村。小宿村、全村流失、死者四十五名。袋倉村、死者十一人。ハンデ木村、全村流失、死者十七人。小世村、全村流失、死者三十三人。勘羽木村。立石村、流家三戸。河原畑村、流失七十三石の内七十石荒れ、死者七人。松尾村、流失六十丁餘、流家六戸、死者三人。坪井村、流失三十一石、死者八人。横壁村、流失三十三反三畝十五歩荒れ。岩下村、流失廿七丁餘、流家廿九戸、死者二人。長ノ原村、死者二百十人。河原湯、死者十七人。矢倉村、流失百石餘、流家四十戸、死者十一人、馬十七頭。林村、流家十四戸。三圓村、流失二萬七十石餘、流家五十七戸、死者十六人、馬八頭。郷原村、流失二十石。横谷村、九十石餘荒れ、死者十一人、馬廿六頭。原町、東組四畝荒れ、流失貳百十六石、流家十六戸。原田村、流失九十石餘、死者七人、馬四頭。小和泉、二丁餘荒れ。中ノ條、流失廿一町。川戸村、流失百三十石餘、流家十戸、死者十人。泉澤村、高壹石五斗荒れ。伊勢町、流失廿五丁、流家二戸、死者一人、馬一頭。金井村、流失畑四畝八歩林三反六畝十九歩。新巻村、流失壹丁四反。青山村、流失七十三石、流家十七戸、死者壹人、馬四頭。岩

井村、流失畑八畝、死者壹人。奥田村。五丁田村。市城村、流失九十二石、流家廿一戸。植栗村、流失二丁餘。箱象村。村上村、流家十六戸、死者三人。園崎新田。川島村、流失百五十戸、死者廿八人、馬若干。祖母島村、流失廿八戸。小野子村、流家十七戸、死者壹人、馬六頭。南牧。死者三人。寄島村。北牧。金井。大島村。白井。澁川。中村。悪津村。添原村。川原島。

即ち田畑四百九十四町三反二畝十三歩を荒し、流家千百九十四戸、死亡者千三百七十三人、馬五百七頭で御座います。そして家を失ひ田畑を失ひて飢に泣くものが三千百五十二人(内男千七百七十六人、女千三百七十六人)ありました。

前申す通の有様で此の年は氣候なども至て不順で御座いました。其一二を申しますと、上州群馬郡三の倉村、中室田村、武州見玉郡渡瀬村では九月に梨の花林檎の花など咲きますし、やはり上州の群馬郡上小野子村吾妻郡本宿村では躑躅の花が十一月に咲き、吾妻郡三原村の山にては五六月鹿が鳴き、同郡三島村にては十月小麥の穂が出、武州榛澤郡では十月に桑の實がなり、奥州では八月雪が二尺も降り、九月一尺七寸降り、七月の四日の朝と八月の五日の朝は日が眞赤く、出羽、奥州では七月三日に日が二つ見へたとの事、又上州碓氷郡では柿の花が九月に咲いたと申ます。

此の際の物價は、金一兩に錢五貫五百文の割で下の如くでした。

天明三年七月

白米百文に一升五合。　麥一兩に二石三斗。
小麥百文に一升八合。　大豆百文に二升一合。
小豆百文に一升九合。

仝　八月

白米百文に一升。　麥一兩に一石六斗。

大豆百文に一升四合。　小豆百文に一升三合。
索麪百文に三百廿匁。　小麥百文に一升四合。

仝　九月

白米百文に一升。　麥一兩に一石四斗八升。
大豆百文に一升三合。　小豆百文に一升三合。
索麪百文に三百匁。　小麥百文に一升三合。

仝　十月

白米百文に一升一合。　麥一兩に一石三斗五升。
小麥百文に一升二合。　大豆百文に一升三合。
小豆百文に一升一合。　索麪百文に二百九十匁。

仝　十一月

白米百文に一升。　麥一兩に一石二斗。
小麥百文に一升三合。　大豆百文に一升二合。
小豆百文に一升。　索麪百文に二百八十匁。

仝　十二月

白米百文に九合。　麥一兩に一石四斗。

小麥百文に一升。　大豆百文に一升二合。
小豆百文に一升。　索麪百文に二百五十匁。

天明四年正月

白米百文に八合。　麥一兩に四斗四升。
小麥百文に一升一合。　大豆百文に一升二合。
小豆百文に九合。　索麪百文に二百四十匁。

仝　閏正月

白米百文に七合。　麥一兩に六斗。
小麥百文に九合。　大豆百文に一升。
小豆百文に七合。　索麪百文に二百廿匁。

仝　二月

白米百文に七合。　麥一兩に四斗八升。
小麥百文に六合五夕。　大豆百文に七合。
小豆百文に五合。　糯米百文に四合。
索麪百文に二百匁。

仝　三月

白米百文に四合。
索麵百文に八十匁。
錢は一兩に五貫六百文。　麥一兩に四斗。

かやうで御座いましたから、關東筋は皆藁を粉にして之を常の食と致し、山に近き方では木の根も草の根も掘り盡し、藤の根やら、松の皮や、蕨の根やら、にれの木の根やら、蕎麥稈の粉やら、稗の稈の粉やら、其外糠までも食し、餓死ぬもの其數を知らぬ程で、日本六十餘州の中四十二國は大饑饉で御座いました。其翌五年は穀熟し、六年は又饑へ、米價など非常に高くなつたとの事です。

そして饑饉のあとは豐年で御座いまして、『今年や世が世で穗に穗がさいた』と申す小歌が大層流行したそうです。

ざんげ猿（下）

園部紫嬌

犬公は肥た男に伴られて、萬年町の宅へ參ると、イヤ居るは〳〵、猿公が六七匹、スルト例の男は白の足を拭て座敷へ上げ、腹を一寸押して見て、丁度好い加減だ、早速だが敎へて見やうが、白此所に居るのだぞ、今對手を伴て來るから。と立たので犬公は何を爲るのかと見て居ると、親猿を一匹抱て來て、白是を乘て步るくのだぞ、夫乘て步けば是を與るぞ、夫好いか步かねエか。と猿を脊へ乘ると、白は兼てよりして猿仲間とは知己だから平氣なもので、スタ〳〵步き出しました。イヨウ奇妙々々、少しも猿を怖しがらねエ、此奴は飛だ掘出物だ、ソレ牛肉だよ、如何だ甘ェか、ハ、、、、、是から好く覺えて吳れ、御馳走は仕てやるぞ。と是から毎日稽古を爲せられたので、猿芝居の馬

に關する藝道は、一切呑込で仕舞たので、十日目から樂屋入を爲る事になりました。

偖て讀者諸君御存じの通り、猿芝居の樂屋は、人形の、、、まねぎ同樣、大道から見える所ですが、或日の事、白公は熊谷の馬に爲す、眞赤面の直實殿をユラリと乘せて揚幕の口に居ると、

ドヾン、チャン〳〵、ブー、(陣鐘太鼓)ドン、ド、、、ドン(波の音)無官の大夫敦盛は道にて敵を見失ひ御座船に馳着て父經盛に身の上を告知す事有と須磨の磯邊へ出られしが船一艘も有ざれば詮方波に駒を乘り入れ沖の方へぞ打せ給ふ。斯りける所に後より熊谷次郎直實。

と義太夫が呼出を掛けると、例の肥た男が白犬のお尻を、持てた鞭で一寸と突く、白犬は此所ぞと舞臺の方へ駈出すと、直實猿も扇を上て、キヤツ〳〵、所が餘り駈け出したので、直實猿は眞逆に、ズトンと計り落馬、オッと口調は悪いが落犬したから、サア見物は喜ぶ、後見は怒る、先に出て居た敦盛卿は、何でも構はず、覺えた丈を順好く演るのだから、敵にころび掛けられて、何か猶豫のなるべきぞと、獨りで犬を乘り返し、滅茶若茶に刀を振り舞して、ドッカと計り座つて仕舞た、其中に後見が直實殿に刀を持せて傍へ連て行たので、猿芝居の見せ場と云ふ組打を抜て突然。

熊谷は御後に立廻り彌陀の利劍と心に唱名振り上ながら玉の樣なる御粧ひ。



と熊谷が敦盛のお首を討ち掛けて、氣遅れがする所へ飛んで、夫からいよ〳〵、

『順縁逆縁倶に菩提未來は必ず一蓮託生南無阿彌陀佛〳〵』首は前にぞ落ちにけり。

と敦盛の首を討て、直實がヒョイと前を見ると、見物の子供がパンを喰て居たので、憐れ萬夫不當、武藏の國の住人、士の黨の旗頭熊谷次郎丹次直實も、曉かけて平山の武者所と、一騎掛の争に、悴小次郎を助け今又戰場の慣とは云ひながら、花恥しき敦盛を組敷きたれば、胡蘿、牛蒡の痩腹に空腹をや感じけん、甲冑の儘駈け寄て、ヒョイと奪取り、ムシヤ〳〵と喰り掛ると、今迄死で居た首の無い敦盛卿も、硬パンに執念を殘して、ムツクと起き、キヤツと叫んで飛び付くと、主人の助勢合點と、馬も二匹でワン〳〵〳〵、スルと樂屋に居た、葛葉、お半、與一兵衛、定九郎に八重垣姫、鈴木主水に岩代多喜太(何れも猿)と三階總出で、パン一個を取り合たので、見物は大笑、後見は自暴になつて、ビシリ〳〵と打擲つけると、例の白犬も三ツ四ツ打れたので、馬の鞍を付た儘キヤーン、キヤーン、キヤン〳〵、(飜譯すれば、痛いぞ〳〵、覺えて居やがれ、此人間)と吠えながら、遂々猿芝居を逃げ。こゝに又彼猿公は汽車の屋根へ落ちたので、茫然乎たる一分時間に、忽ち田端王子を過ぎ、浦和の此方へ參つた時、始て驚き。何だらう此奴は、百足の化物かな、夫にしちやア足がなし、ト云て蛇でもなからうし、何にしろ怖しい吠やうだ、此奴お脊に乘て居る事が知ると頭から、怖しい〳〵、何でも逃るに限ると、一番飛降てくれべい。と止せば好いのに、ヒョイと飛ぶと、コロ〳〵〳〵、オウ痛へ、此奴猿を投やアがつたな、さるとは〳〵悪い奴だ。と四邊を見ると、汽車は彼方の森へ隱れた、ヘン何様ものだい、己が脊から飛降る、グツと睨む、ハヽヽヽヽ、己は如

何した剛者だらうて、マヅ是からは何處へ行うな、彼方の森か此方の山か、ハテナ。モシ先生。キヤツ、何だ吃驚させやアがるぜ、誰だい、エー誰だい。先生私で、モシ先生。ハイ／＼何誰で、オヤ此奴ア變だぞ。此所では先生、田の中で、モシ先生。エー蒼蠅、田の中だあ、……キヤア／＼、首だけだ／＼、た、助て呉れ此通り／＼、先生私こそお助なすつて下さい、拜みたいにも手が出ません、お叩頭をすると鼻の頭へ田螺奴が嚙付きます、何卒お願ひでムいます。ナツ成程、是は不思議だ、お前さんお狸さんで、ハ、ア成程、一躰如何した理屈で、田の中で行水をおつかいなさるね。先生實はね、私は御覽の如り小狸なので、親狸が腹皷の稽古を仕ろ／＼と喧々敷申しますが、如何した物だが、可忌でなりませんから、遂休みました、スルと、今日は何でも稽古しろと云ひますから、此所へ來て腹皷をポン／＼やつて居る中、實は子、一寸其化て見たくなツたんで、田の畔へ來て、水鏡を仕て考えて居ると、後からゴロ／＼、おまけに黒い化物が飛降て、キヤツと云ふので吃驚すると、遂一寸飛込だので、ブク／＼と首計り、コウ斯樣云ふ理なので。ウップ、馬鹿な奴だな、己なぞはゴロ／＼の化物へ乘て來る位な英雄だ、夫に手前はゴロ／＼キヤアでぼちやり、餘り智慧がなさ過ぎるぜ、エーと斯樣もあらうか、成程。

ぽん／＼が痛いと嘘を月の夜に、
皷の稽古やすむ小だぬき

名歌か／＼、名歌だ／＼、時に先生。何だ。何卒お助け下さいまし。オツと宜し／＼、今助けてやるがの、如何だ己の賴を聞て呉れるか。ハイ／＼何なりと。ウヽン乾度だな、必で。左樣定れば云ふが、手前の持てる巾着を己に呉ぬか、ヘエー巾着、左樣物はお生憎樣、持合せませんから、何か其外品を、何の無い事がある

ものか、昔から云ふぢやァねエか、狸の巾着八丈縞と。へ、エ夫は彼子の巾着で、手前のでは無いのか。私のは八疊敷で。フン左樣か、左樣ら要ねい、勝手に其處で死で仕舞へ、狸の巾着八丈縞、讃岐の金比羅大權現と、弄戯ながら何處ともなく、行て仕舞ました。

夫から半年も經てから、浦和から二三里這入た山の中を、一人の紳士が洋犬を連れて、頻りに獵を仕ながら參りますと、此方の雜木の間から、狸に好く似た老爺がビヨックリと飛出て、旦那樣お獵でがんすか。左樣だよ、ダガノ獲物が誠に少で困るて。左樣かね、す



んだらはァ、私好土地のう敎てやんべい、此路さァ何處迄も行と、小い山があるだ、其處に一匹猿が居るが子。猿。と紳士は禮も云はず駈出ました、デスカラ洋犬も一生懸命續いて行くと、敎の通り山があつて、偖て成程猿も居ました。

ズドン、キヤツ、紳士は大丈夫、〆た。と叫んで駈出ましたが、川があつて行ぬから。チヨッ廻り道か。と林の中へ入りました、洋犬は川を渡りて、先陣を仕ると云ふ見得で、彼方の山へ登り、唯一嚙と猿を覗て嚙付くと猿は犬を一眼見て待た犬公、猿だ、云ふ事がある待て呉れ。遠寺の鐘がボオン、呼小鳥がボー、ボー。犬公今己が云ふ事を、マア一通り聞て呉れ。と是から今迄隱居さんの恩報じも仕ず、惡事計りやつて居たが、最期の際に古朋輩の犬公に計らず逢て改心したと云ふ、芝居的の臺詞があつて、犬公も大層喜ぶと、其處へ亦狸が出て、先刻老爺に化て出て、猿を殺して貰つたる

は、去年自分の悴狸が死にかゝつて居るのを、助ても呉れず見殺に仕て呉れた恨を報したのだと、物語があつて、各々。性は善なる者じやよなあ。と泣て居る所へ、紳士が來たので、狸は逃げ出す。猿は死ぬ、此處で先完結だが、此猿は紳士が持て歸つて、下谷五軒町の動物標本製造所へ贈たので、此節は標本となつて、ガラス箱の中に廣告を持て立て居るし、例の白犬は一度芝居を勤めたゞけ藝があるので、大層紳士の氣に入て、一生樂に暮したといふ。

猫ですか、彼斑は溝へ落て、一度助りましたが、後ち猫泥棒に殺されて、遂々三味線の皮と化け、今でもお主のばちが當つて居ります、マア／＼是で例の通りめで度／＼。

菊と萬年青

團子坂染井の菊は本年意外の上出來にて人形も目下夫れ／＼計畫中なるが美麗に出來すべしといふ切花は昨年一本一錢五六厘の物昨今は一錢乃至一錢二三厘東物は一束九錢乃至十錢位にて上物なりと次に萬年青は兩三年前より中々流行し始め昨今は甚だ珍重する樣なりしかば根岸萬年青屋にても來る二十日より例年の共進會を催す由今其模樣を聞くに青葉にても稍藝あるは五六圓位最上物根岸松の類は一葉百圓に及び縞甲龍などは一株千五百圓を値するものなりといふ總じて當今は大物流行の傾きにて小萬青年は先安値なり

科學

カンガロー

松ヶ枝女史

世には珍らしき動物もあるものだが、「カンガロー」(俗に袋鼠といふもの)も慥かにその一つです

カンガローは四足獸有袋類に屬して居りますがその奇妙なのは牝の腹部に「マルスペアム」(袋といふ意義)といふ二個の奇妙な骨で支えられてある囊狀の附屬物があるとです、カンガロー族の稚子は哺乳動物中最も小さ

く且つ不完全な有様で生きて來ますのでこの嚢は即ち第二の胎となつて嬰兒を成育する處なのです凡てこの族の嬰兒は生れた時の發育が至て不完全でカンガルーの如き嚢を持たぬ種族でも嬰兒は或る期限の間その母の腹部にすがり付て居るそれから少し成育すれば背に上ぼつて尾を母の躰に捲き付けて以て自分の體を支えて居ります

カンガルー族の腹嚢は懐胎して居らぬ時には一種の奇妙な汾泌物で固く體に密着して閉ぢてありますが妊娠の期が熟するに從ひその汾泌液がなくなつて嚢の稍が弛んで參りますそうして胎内の嬰兒が胎を去るの期に至りますると外部の腹嚢は丁度それを受けて保育するの用意が整ふて居ります

何故この種族の嬰兒が胎内の發育かく不完全で且つ又懐胎の器も何故かく不思儀なのだろふと思はれましよふが此には所以のあるのです

有袋獸の奇妙な懐胎は恰も哺乳動物の完全なる懐胎と禽鳥の卵子をゝく性能との中間にありまする鳥の如く飛翔する種族がもし胎内に嬰兒を宿すも致しますればその數の多寡に係はらず何程妨げになるか知れませんそれ故禽鳥は卵子を生んで自分の躰から別にしてその子を發育させます又地上にあつて跳び走つて行るくの天性を授けられて居りますものは矢張り完全な哺乳動物のやうな懐胎の有様では空翔ける鳥同様な不便を感じますそれ故懐胎の有様は不完全でその子が胎から出た後に腹嚢即ち第二の胎で發育せらるゝやうになつて居るのです鳥は一時に二ツ以上十五或は十八ケまでの卵子をもちますが有袋獸は一より十二までの子を生みます

カンガルーは牙を持ちませんその齒の大躰の構造及び消化器は餘程反芻獸に似て居りますそれ故或る書にはカンガルーは反嚙すると申てありまするカンガルーの

胃は大きくて二つの細長い嚢から成り立つて餌食は凡て植物です

カンガローの後脚は至て長く力强いが前脚は又至て短く小さい尾も長く强く厚くて後脚と共に跳ぶ爲め防禦との要具です

カンガローの跳ぶとは至て輕捷で一時に驚くべき人の距離を跳び超ひますが是れも造化が丁度よくかゝる天性を授けて下されたのでカンガローの生國にあつては是非ともこの大距離を跳ぶ事の必要があるのですカンガローの捿んで居る地方には草や灌木の簇りが沼地に生じて居りますが簇と簇との距離は大底餘程離れて居りますのにカンガローはその天性の跳ぶ力を以て五六尺の高さを十二尺より二十尺位の距離に跳びはねて一つの草簇から他の簇に移り行つて以て追撃者の手を免かるゝのがムいますカンガローを英國や米國などに移して餌育いたしますると尾の力は漸々減少し形ちも異つて參りまして走る時に四足を多く用ゆるやうになりまする是れは實に造化の妙作用で萬物に各ゝその周圍の狀態に從ひ必用なものは供給し不必用になつたものは取り除くるといふ好例證でムいましやう

頭は形ちがやゝ鹿に似て居つて小さく耳は程よい大さで楕圓形で眼は大きく温和な風を含んで參ります

カンガローの頭と前脚との小さなのは跳びはねるに便利な爲めで即ち跳ぶ時にその五躰を空中に殆ど直立せしめて地に下る時は躰の下部の重量が丁度よく自然の態度にその五躰を地に落ち付かさせて又直ちに跳び出すによいやうになつて居るのでムいます

新宿の御料地の動物苑に牝牡のカンガローが居りますが全躰この獸は濠洲即ちオーストラリヤに産するのでニユー、グイチヤとその近隣のある島嶼に産するのもありますが數が少く種族も聊か違ふて居ります或る書物で見まするとニユー、グイチア種族の方は已に千七

百十一年の頃ル、ブラと申す人に依つて記されてあるといふことが書いてありますがオーストラリヤに産する大カンガローのことは千七百七十年の夏即ち今から百三十年計り前にコック氏の最初の航海の時見出したのでそれまでは歐洲人も大カンガローのことは知らなかつたのでムいます

色は鼠がかつた茶褐で毛は程よく長く程よく柔かでムいます肉はなか〳〵美味だといふて濠洲邊の移住民は大そうに珍重いたします

カンガローは元來柔和な性質ですから何かに追はるゝ時なとは非常な速力で跳び逃げまする

大カンガローは獵犬すら及ばぬ程走るに敏捷でムいます或るカンガローは平原に棲んで居りますが多くは森林を棲家として居りまする然し又稀には濠洲最高の雪を戴く山頂に棲んで居るのもムいます形ちは様々で中には兎と同じ位なものもありまする何れも容易に馴致することが出來ます。

此頃の垣の結目や初しぐれ

家政

家庭敎育と實驗

智識はもと實驗の結果、學問はつまり古人の實驗を聽き集むるものですが、精確の智識は古人の實驗を聽き集めただけでは得られません。是非出來得るかぎりは手から之を驗して見ることが必要で御座います。

それ故子供を敎へ育てるには成るべくいろ〳〵の事を實驗出來るやう便宜を與へ、傍らより之を補ひ導て自ら之をなさせることが肝腎です。世には危險を恐れて、遊び居る子供に、あれをしてもいけぬ、これをしてもならぬ、など勿れずくめの命令を下すものがありますが、其間違ひな事は申すまでもなく、又子供のなし得べき事のある時など、之を敎へてなさしむる事を

もどかしがり、自分でした方が餘つ程よいなどとて、少しの面倒を厭ひ、往々に子供より其實驗の機會を奪ひ取るものが御座いますが是亦心得違ひです。兎角干渉の餘りに折角出かゝつた智識の芽を折り、又は苗の長ずるを望んで之を抽くやうの事は世にありがちで御座いますから、よく注意して、打捨て置く時は後に取り返しのつかぬ事の外は、成るべく子供を自由にし出來得るかぎり物事につき實驗せしむるのが宜しふ御座います。

子供と鷄

少し廣い庭のある家などでは、子供に鷄を養はせるのがちよつと思ひつきの事です。鷄を養ふのは子供の喜ふ事ではありますし、運動にもなり、禽鳥に關する注意智識慈愛心などを起さしむる一端ともなり、又卵を賣て貯蓄せしめ雛を育てゝ之を賣り、その價にて欲するものを買はしめなどせば、自分の働きで得たものとて其喜びも一方ならぬものです。

雜事片々

(1)若しあやまつて火傷をいたしました時にはその處が疱になりましたならば、破りませんやうに冷水又は石鹸を溶した微温湯に浸して後に曹達を溶したる水又は温飩粉を塗りつけ其上を木綿切に包み置きますれば治ほります。

(2)中毒いたしました時の手當は芥子を水にて飲み中りたる毒を吐き其際腹痛或は下痢する時は鷄卵、牛乳、又は鹿菜角を煎じて飲ませ、して此時頻りに眠るものには芥子を攪きて手足へ貼ると宜しふ御座ります。

(3)虫歯は余程難義のもので御座りますが、銀杏を一ッ二ッ食後に嚙むか或はヒ子茄子を黒燒にして痛む歯

に附けますれば治ほります。

(4)衣類に酒のかゝりました時には速かに灰をふりかけ乾ひた後に拂ひをとし其もはやしみとなりましたものは大豆又は豌豆の煮汁に半日計浸しおきて後に水で洗へはよくなります。

(5)白き衣類を釘などに掛けますと鐵の錆がつきまして赤くなる事が御座りますそれを取りますには小さき桶に、ごく熱き湯を入れ其のさびのつきました處を湯とすれ〳〵にひろげ、さびの附きました處へ硝石をおきますれば硝石は湯のためにかけてさびは取れます、然ししみの附きましたら早く扱かなければいけません。

裏地の色

袷又は布子の裏地に用ゆる羽二重金巾の花色など手足に色つきて身體青鬼の色を為す、これを避くるにはまだ仕立ぬうち一旦反物のまゝ酢につくれば奇妙に色うつらぬものなり

帽子の塵

夏季の間に黑の帽子に塵埃つきて茶色を帶ぶるに至らば、清水に布切を浸しこれにて能く塵埃を去り「ブラシ」にて拂ひ置く時は元の黑色にかへるなり、但し古びやけて羊羹色となりしものは其効なし

鐵物の錆

火鉢の五徳又は火箸、庖刀、鋏刀、ナイフ其他一切の鑄物に錆附着せば、キメの細き「ザムペーパー」(一枚二錢、鐵物屋にあり)にて磨くべし、殊に火鉢の五徳は成るべく之を用ゐて光らせ置けば何となく心持のよきものなり

東京建物株式會社

諸新聞の廣告にも見えし如く、安田善四郎始め東京府下の有名者相謀り、土地建物の改良機關及土地建物の金融機關たるの目的を以て、東京建物株式會社なるものを設立し、本月一日より營業し始めたり(資本金百萬圓)かゝる會社はいつしか起るべしとは思ひ居たるに、果して之あり、方法宜しきを得ば、必らず世益を爲すべし、今や東京の住民の其七八は借家にして、月々若干の家賃を收めて生活すれども、其家賃は高利にして、而も幾年借家をしても得ること一もなきに反し、該會社は五年期又は七年期又は十年期、又は十五年期に月賦を以て償却せば住み居る家は自己の所有となる組織なり。

東京市に於ける建物は市區改正、水道敷設の事業と共に改良を計りて市の形體をして中央都會たるに恥ちざらしむべし、これ該會社設立が有形的利益を與ふる一にして、毎家の人をして貯畜心を起さしめ、且つ恒産恒業の念を高からしむる、これ無形的世益を與ふる一ならん。

今該會社の要領を擧ぐれば左の如し。

該社の事業は從來世間に行はるゝ土地建物貸附よりも低廉にて土地建物低當貸附金。又土地建物の購入及賣却。廉價にて土地建物賃貸借。諸取證券擔保貸附。土地建物賣買貸借紹介なり。

該會社に向つて月賦建築を依賴せんとならば、申込人は自己が好める家屋を該社と契約を締結すると同時に、其保證金として建築金額の三割のもの(建築家屋千圓のものならば三百圓)を會社へ差し入る(保證金には利子を附せず)。

建築落成したる上は三割の保證金の内一割は月賦契約保證金として會社に預り置き、二割は一時拂として月賦契約元金の内へ編入(此保證金に利子を附す)する組

織なり。

土地建物の賣買を依賴する場合には三百圓迄十錢、三百圓以上千圓迄二十錢、千圓以上三千圓迄三十錢、三千圓以上五千圓迄五十錢、五千圓以上一萬圓迄七十錢、一萬圓以上壹圓迄の手數料を會社に納めしめ、土地建物貸借紹介の手數料は賃料月額の二十分の一を會社に納めしむ。

さて建物月賦償却につき某新聞は左の如く記しぬ、

(前略)會社の營業規則に就て之を見るに先づ家屋建築を請ふ者は本社若くは取次所より申込用紙を受取り之に申込事項及び建物土地等の詳細を明記し本社若くは取次所に差出し愈々承諾を得たる上は契約を取結び其建築費の三割を差出さゞるべかず例へば千圓の家屋なれば先づ三百圓を會社に差入れ置かざるべからず而して此の三百圓は無利足なるが故に建築に一年を費やすものとすれば一年間無利足にて會社へ預け置かねばならず。斯くて建築落成の上は右の內百圓を月賦契約保證金として依然會社へ預け置き之に對しては相當の利子を受け殘額二百圓は一時拂ひとして月賦契約元金の內へ組込まるべし。而して千圓の內此一時拂ひ金二百圓を差引きたる殘額八百圓を十五年間の月賦にて償還する時は之に千圓未滿年一割二分の利子を付し毎月九圓七十八錢八厘づゝ會社へ仕拂はざるべからず。又此契約を爲す者は其の建物に必らず火災保險を付せざるべからず(保險は會社と同一躰なる東京火災保險會社に限るものと知るべし)して其保險料は當人より仕拂ふものなり故に千圓の家屋に對し三分の保險を附するものとせば月々二圓五十錢程を支拂はざるべからず此他地代は無論支拂はざるべからざる次第なれば千圓の家屋に對し十五ヶ年間に會社へ仕拂ふ高は二千三四百圓となるべし此巨額の拂込みを終りたる上にて右の

家屋は始めて當人の所有に歸する仕組なれば愈々所有に歸したる頃は大槪の家なれば隨分荒れに荒れて原價の半額にも至らぬ程となるべし。(後略)

素より高き利子につくには相違なきも、高利貸より借金して家屋を建築し又は現今の如く高き家賃を拂ふよりも割合はよし。

且つ約束期限も十五ヶ年は餘り長期に過ぐるの嫌あり、眞に我家屋と爲さんと欲するものは、五年期乃至七年期、長くて十年期なり、次に五年期乃至七年期の年月賦償却金高表を擧くれば左の如し。(利子割合壹千圓未滿年一割四歩、壹千圓以上年壹割一歩)

元金	五年期 年賦	五年期 月賦	七年期 年賦	七年期 月賦
百圓	円 二三、三〇二	円 一、九四二	円 一八、六五五	円 一、五五五
千圓	二二六、四五六	一八、〇三八	一六九、七七二	一四、一四八
五千圓	一、〇八二、二八〇	九〇、一九〇	八四八、八六〇	七〇、七三八
七千圓	一、五一六、一九二	一二六、二六六	一、一八八、四〇四	九九、〇三四

社交一斑

流行の栞

堆朱の櫛　流行子

珍奇なる櫛出でたり、其は堆朱の櫛なり、從來堆朱の櫛なきにあらす、されども是まで行はれしものは黑鼈甲を臺にして其上に堆朱を施しこれに彫刻をなしたるものなるが、今度尾張町白牡丹本店にて新工夫を凝せしものは、ムネは勿論齒に至るまで一枚の堆朱を用ゐこれに精巧なる彫刻を施せしものなれば、凝つた品ものなることは申すまでもなく、すつさ通人の用ゆる品なるが、價廉なるにあらす、また堆朱の原料に限あれば一般には擴がらざるべし、併し白鼈甲も持ち、蒔繪も持ち、鼈甲地堆朱も持ち、名木のも二つや三つは持ちてこれから何か面白からうさいふやうな人にはぴたりさ嵌つた品なり

帽子さシヤツ

洋服の流行は次號に讓り、こゝに帽子さ襯衣さの流行品を示さん

帽子は山高からす、緣も廣からず小ぢんまりしたるものにして、山は

角張らず丸味の穩なるを可とし、すべて商人的のやうなもの最も流行、色は黒九分、其他色物は一分（二圓五十錢より五六圓の處）、略帽は薄羅紗の粗き縞柄なるを可とす、色は淡色にて、外套の色と同樣なるは面白し、形は昨年と變らず（一圓五十錢以上）

襯衣は折襟のつきたる英フランネル製最も流行なり、胸を紐メにする仕立は最早流行せず、但し洋服を着する時は、脊廣には「カラ」胸當及「カフス」をつくること流行せず、襯衣の上に直ちに襟飾をつけること一般の流行となれり。



圖に示せるは帽子とヅボン釣代用の腰結なり、すべての附屬品は次回に記すことゝなしぬ。

可憐の兒女

來る十一月十五日は例年の通り男兒五歲、女兒三歲と七歲を持つ世間の親達は兒女の手を携へ親類緣者を打めぐりて信仰の神社へ參詣して兒が將來の繁榮を希ふ祝日にて娛樂を兼ぬる言はゞ親達殊に母親が樂みとする日なれば成るべく佳美の衣服を着けしめんと欲するは、蓋し人情の自然なるべし、今より其日まで一ヶ月餘あれど染上仕立等のため今より流行の品を案内し置かん。

七歲の女兒　高等につくらんとせば言ふまでもなく縮緬の三枚重とし、色を淡桔梗、鳩羽鼠、淡あづき、櫻鼠、紅藤の內にて好み、ぼかしの處の色を淡女郞花、玉子、白茶、肉色の內にて摸樣を裾の方を一尺四五寸の高にし、袖下の處を三四寸に染めなすべし、勿論此好みは本だちなることは言ふまでもなく、袖の長さは孰れも二尺以上に至れば着して袖の地に垂れなんとす、さて其流行の模樣形は遠山の日出に千羽鶴、四季の遠景、春の圖色、須磨明石、櫻に紅葉に幔幕の源氏模樣、古代波に鵆、蓬萊山、嵐山等最も優美高尙、下着二枚は胴拔なるが、其胴は紅の板メ又は玉糊縮緬にせば無類なるべし、紋は三ヶ所にして其大さは鯨七分の處、最も可、次は無地の紋附なるが、色は前記の內にて撰み、紋の個所と大きさは前同樣、下着二枚を幽禪縮緬にして無垢仕立にあられば、藤色、紅藤の縮緬をつけるべし、中着は通し仕立にし、下着は比翼仕立も宜しからんが、着しよきは胴拔に如くはなし、其胴は佳美なる板メ絹に限るが如し、以上の一襲出來上りの價六十圓前後、中四十圓前後なりといふ、次は縞物なるが第一は京お召の紫柑地の瀧縞か、紫の矢がすり、第二は八王子糸織の同樣の柄にして裾まはしは藤色の甲斐絹適當なるべく、袖口は友切ならば繻子ならん、勿論此好は二枚重にして四つ身立ちと知るべし價格一襲二十圓より二十五圓

位なりと

帯（第一）前記ぼかし摸様に適する帯は尺五六寸巾の糸錦にして、其色と摸様は黒地の石竹（十六圓）裏葉柳に牡丹に菊に梅に實つなぎ（十六圓）紅地の笹に梅（二十圓五十錢）本紅地の葛玉（廿七圓半）淡利久に末廣に四季花（廿三圓五十錢）紅地に牡丹に芙蓉（二十四圓）紅地に菊水（廿一圓）紅地の色紙に古代菊（十九圓八十錢）お納戸地に立わくに菊（十七圓五十錢）地黒地に龜甲に菊（十六圓五十錢）黒地に紅葉狩（廿四圓）飛び色地に菊水（廿六圓五十錢）前記の如く紅地と黒地の菊花の形多かり、こはメたる上にてぼかし摸様の大きに見榮ある所より起りし流行ならんか、（第二）無地の紋附と縞には矢張糸錦が廉なるものにて博多ならん糸錦の摸様は（尺二三四巾）淡利久に雛に古代鳳凰（十圓）淡藤地の菊に紅葉（八圓二十五錢）紅藤地の重ね格子に菊水と菱形の段型（十圓五十錢）肉色地に古代松竹梅（十圓三十錢）紅地の大形末廣に菊、牡丹水ぐるま（十九圓八十錢）肉色地に古代桐と菊（廿一圓五十錢）紅地の翁格子に古代花摸様（十七圓）裏葉柳の菊に梅（七圓廿五錢）紅と濃鼠の一升に菊水（九圓廿五錢）肉色地に櫻と桔梗（七圓廿五錢）以上帯地は新意匠を以て知られたる白木屋が殊に注文して織出せし數ある内にて世間の需用多きものと予が目に止まりし一部を記せしのみ。

上メは昨秋も記せし如く鬱金縮緬一品に限れるやうなり、此色は衣服、帯の如何なる色にても不思議にも引立を能くする故に、斯くは流行の域に達せしなり其他は桃色縮緬か紅の花まぼりなるべし以上價二三圓位

五歳の男子　は最も高尚に、最も優美に撰まば紋羽二重、紋甌綃を袖丈長く黒の熨斗目摸様の上衣に下着を同地質を淡柿か肉色の無地に染め、上着を紋の六分大きさに三箇所にあらはし四ッ身だち無垢仕立の三枚襲とし、帯を博多の玉蟲獻上か肉色又はお納戸の瀧縞か、大形の龜甲或は實つなぎの肉にて好み、袴を前黄糸入の仙臺平にて好む、（此一揃の價凡四十圓前後）次は帯と袴とを前記の如く撰み、上着を黒羽二重の三紋に下着一枚を肉色又は素鼠に染め裏は適當なる色絹をつく（二十圓以上）他は八王子糸織の縞物にして帯は矢張に袴なし、さて羽織は前記第一の上には黒の紋羽二重か、黒縮緬、第二には黒七子にしていづれも三ッ紋なり、裏地は贅澤にせば無双仕立なれど、普通は佳美なる縞或は綸甲斐絹を用ゆべし（價上十圓、中七圓、下五圓）但し衣類の普通の紋附及縞物の上に着すべき羽織の色は黒と淡鼠と伯仲の間に流行せり。

雜録

小兒の世界

天水生

大英雄と犬

ビスマルク公と申せば三尺の兒童にも能く其名を知らる〻獨逸の大政治家で世界の大英雄でありますが、かの人は甚だ犬を愛する性質で其養へるものにはなかなか珍らしき犬もあるそふです、其中で「ライシュフンド」則ち「皇帝の犬」と云ふ種類のものがありましてビスマルク公は特に其犬を愛して居られたそふで先頃不幸にも其犬が死にました時には其事を電報にてウヰルヘルム皇帝に御知らせをしたと云ふ事です、其犬の名はタイラスと申してビスマルク公の忠實なる從者でありまして何時も公の足下を離れずに居まして如何様わ

れは世界の大英雄大政治家の友人であると云ふやうな所が見へて居たと云ふ事です、此犬につきて面白き話があります、數年前に世にも名高きベルリン會議と申してベルリンの市にて歐洲の三四の大政治家が會議を開きし事が御座います、其時に愛犬タイラスもビスマルク公と共に其塲に列したと云ふ事です、然るに或日の事會議に來りし露西亞の政治家とビスマルク公と話しをして居ましたが、かの人は話をする時に手を振り頭を動かしなどして大に手様をする人でありました、それで段々と話が進むにつれて思はず知らず大手を擧げました所がビスマルクの愛犬タイラスは之を見て我主人を打てか〻るのと思ひしと見へ忽ち露西亞からの御客様にかみ懸りて傷けやうと致しました其際にビスマルク公は驚きて犬をしかり、漸くに無事にすみましたと云ふ事です。露西亞からの御客様は大變におそろしかりしと見へ後々までもビスマルク公が犬をけ

しかけたように思ふて居たそうです、けれどもビスマルク公と其愛犬をかね／＼よく知りて居た人々の間には笑ひ話の種ねとなりました。

ビスマルク公はこのタイラスが死しまして後は大變に追惜して今に悲んで居ると云ふことと。

奇妙な御客樣

或る家のおとなしき坊樣が御母樣から少さな手風琴を買てもらいまして毎晩夕飯のすみました後ちに御母樣の御膝下でピー／＼と手風琴を鳴らして居ましたところが其風琴の音が面白いと見へて小さな三個の御客樣がこそ／＼と室の隅から出てまいりました、其御客樣はドんな人かと申せば鼠でわります、初のうちは多少こは／＼ながら出てまいりましたけれども御母樣が時にはお菓子の屑などまいてやりますと段々と馴れて後には坊樣が風琴を鳴らすと其音樂につれて踊りまわりて樂しむよふになり今は坊樣の大事な友達となり家内の皆の人から可愛がられて居ると云ふ話です、どんな動物でも程能く馴らしたら段々となづいてまいるものと見へます。

暹羅國土人音樂（口繪のとき）

暹羅旅行者　南　蠻　鐵

暹羅國土人の風俗習慣に就て一々細々と記述せば隨分事新らしくして且つ喜ぶ可く笑ふ可き事實の數多かる可けれど今は唯音樂の一事に關して少しく記する所あらんと欲す

然れども玆に一つの艱難なる事情あり余は總ての事に於て識狹く知淺きが中に別けて美術の心得に至つては少しも之れなき沒風流の人物なれば今暹羅の音樂を記するにも美術學理の上より解剖説明を試みるの識見なし若し幸にして讀者と一堂の内に相會するを得ば非常の勉強を以て脩得したる一節を歌ふて聞かせたきも

のなれど夫も叶はぬ企なれば唯自ら目に見耳にて聽きたる事實を書き寫して讀者の一粲に供することゝせん

暹羅土人は何事が第一得意の業なるぞと問ふ人あらば賭博を外にしては外國語學と音樂の才なりと答へんと欲す彼等は寧ろ人間よりも禽獸に近きものと見へて赤心頭腦の活力は殆んど絶へて見得ざれども口眞似、手似は甚だ上手なり彼國の中等上等と言はるゝ社會の人士は能く巧みに英語を操る其音聲語調度に合ふて支那人などの及ぶ所に非ず去れど英字を書き英書を讀むものに至つては僅に指を屈して數ゆるにも足らざる位の有樣なり

音樂の才に至つては確かに人並〳〵の天賦を有し居るが如し人並の才を有すると云へば彼等に對しては是れ最上等の稱譽として解し給ふ可し余は去年十月日本の輕業師が盤谷に來つて興行したる時に土人の樂隊は彼等の求めに依つて西洋流の音樂を奏したり而して時に暹羅國の歌を西洋流の音樂に和してやりつける處中々平生思ふ暹羅人の手腕とは見へざりき

暹羅普通の土人は通常多く笛を弄ぶ、其笛の構造や日本の篳篥とか云ふものに似たれど其音聲は大ひに異なり笛とも亦特別にして一種高喧の音あり其他三尺計りの短琴あり恰も月琴の柄を長くしたるが如き木製の三絃あり胡弓あり鼓樣のものあり太皷に似たるものあり竹管あり是は極小なる鐵槌にて拍くの仕組となり亦金屬にて製したる鉢樣のものあり小鐵槌もて撃つこと竹管と相同じ

暹羅に於て一般普通の人民中にも此等の樂器を弄して自ら樂みとなすこと我が日本と異らざれども舞蹈や音樂を以て一箇の職業として生計を營むこと亦我國の所謂藝者の如きものあつて組合をなし居れり彼等の組合は一定の會館を設け席料を徴收して興行するものも

あれど亦貴族大臣の内にかゝえものとなり生涯を贅澤家の玩弄物となつて終るものも亦尠からぬ次第なり
余唯一度會舘にて暹羅固有の音樂を聞きたり此時の組合は極めて小なるものにて一組五人の女なりしが一人は短琴に倚り他の一人は鼓を持ち一人は竹管を前に置きて小鐵槌を以て向ひ他の一人は金鉢を据へて小鐵槌を採れり其態度風采已に我等の目を喜ばしむるに足る而して其樂を合奏して國音をもて相歌ふや或は緩に或は急に時に低きが如く時に高きが如く音調自在抑揚頓挫の妙を極む音響支那流に近くして少しく喧囂の嫌なきにあらざれども高朗快活の調に少しく悲憤の趣味を帯ぶる處また青衫を濕さしむに足るものあるなり或る西洋人は音樂家として支那日本の人民よりも多くの天賦を有すと云へり
其歌には歴史的國民的の高尚なるもの無きにあらねど多くは戀愛の歌とか或は寧ろ猥褻極まるもの而已なり、詩歌の類若し國民の元氣に關係することありとすれば暹羅の詩歌は亡國の詩歌とこそいふべけれ

耻

三　鷹　子

『花ざかり散るより外はなかりけり』とは謙遜を敎ふる樗堂が發句にして、滿ば損を招くといふ聖人の言を譯せしもの、尤も人の持て囃す『世の中は滿れはかくる習ひなり十六夜のそらや人の身の上』といふ和歌と心は一つなり、少年の士女よろしく心を玆にとゞめ、たとへば柳の折れざる如くつゝしみたまはんことを請ふ、其訓にもならんかと、書集めたる藻汐草、耻と題してこゝにかゝぐ。

其一　太申

文政の頃、江戸三十間堀に和泉屋とて年久しき材木の問屋あり、當代の主人名を甚助とよび、俳名を太申と

いふ、性甚たしく見榮を重んじ、如何にもして己が名を廣く世間に知らせかつは後代にも、傳へんものと、おもひたち、神社佛閣の建立に、或は道路橋梁の修繕に、さては廓の遊び芝居の見物より乞食非人の施行に至るまで、あるにまかせて莫大無數の金をなげうちて更に物の數ともせず、唯々和泉屋といひ、太申といふ、屋號又は俳名の至らぬ隈なく鳴りも響かんことにのみ心をいため、少しだも其手段あればたとへ如何なる者なりともゆめ〱其人の門地を問はで交はりしかば儒生醫者工藝俳優歌妓幇間博徒浮浪の輩まで、日毎々々に出入するもの殆んど數百、酒に明し酒に暮してたわいなし、染工をよんで樣々と工夫じ、己が俳名の太申といふ文字と花菱の定紋とを面白く染出したるものこしらへしめ、これを太申染と名づけて價やすく市に賣らしめ、又幾千枚の仕着となして出入のものに與へしも何故にや左程流行を盛んにせず、玆に於て太申は思を轉じ、時の賣出し花形役者中村傳九郎といふに多くのつかひものをなして賴みにたのみ、舞臺に於て太申染を着んことを求めしに、傳九郎はつかひ物の手前いなみもならず直ちにうけひき、其次の興行にきられ與三郎の着つけとしてこれを用ひしかば何がさて浮氣なる人々我も我もと持て囃し、江戸の町中男女の別なくこれを着ざるものは時に後れしそしりあるに至りたり、太申いたく是を喜び其賣行の程をためし見んものと知らざる眞似して己れ自らさる呉服屋の店に至り、此頃流行る太申染といふもの日々に何程出づるやと問ひしに番頭は太申染といふもの如何なるものにや知らずといふ、甚助はさてもうつけたるものかなと心の内いたくもさげしみ笑ひながら、太申染とはこれよとて携へ行きし小片を出して見せけるに、番頭は兎見角見て後これは太申染にあらずと答ふ、いぶかしみつゝされば何といふぞといひしに、これこそは今流行を極め

つる傳九郎染と申すなりとかへすを聞き大ひに愧ちてかへりしとぞ。

其二　蒹葭堂

木村孔恭といふは浪華堀江の人にして、上述の太申と殆んど時を同じふす、字を世肅といひ蒹葭堂と號す、其見榮を好み名譽を重んじつることはやゝ太申に似たれども行き方はいたく相違せり、彼れは遊蕩豪俠の事を以て世に知られんと志し、これは博學多才、通せざることなきに依りて後に傳へられんと欲す、相方較べ見る時は孔恭の方優れりといふべし、されば孔恭は多くの隨筆雜纂によりて種々様々の才を集め、凡そ天地の間にありとあらゆるもの上は天象より下は魚介昆蟲に至るまで一として達せざるなく知らざるなく、一を以て問へば十を以て答へ更らに盡くる處を知らず、全國に漫遊して普く四方の知名の人々其如何なるといふに別なく、一々に其門を叩いて交を求めたりしかば、家に歸りたるの後とても書簡の往復日と共に多くして、机上に堆きもの更に止むなし、遠來の客殆んど席に絶ゆる日なく、當代の名家足を浪華に入るゝ者は必ずや蒹葭堂に行かざるなし、書畫骨董の珍藏千を以て記すべく百を以て數ふべし、性僻にして才名高き者に向へば禮容誠に恭々敷も無學なる者に對してはつや／＼寒暖の辭誼さへ述べず、いとも剛慢不遜なり、或日多くの名士達懐德書院といふに會して酒宴を開く事のありしに孔恭も亦招かれて相列なるはいとゞ名譽の事といふべし、甚だ喜びて宴に就き揚々として自得の心あり、闌なる頃孔恭は禮をたゞしていづれもにむかひ、先生方は皆これ當代屈指の大家盛名無比の御身なり、我はたゞ市井一介の逸民愚鈍取るにも足らぬものゝ幸にも一面の識を辱ふし、かゝる宴席にさへもつらなること欣喜此上とては候はず、と述べも終るや終らざるに上席にありし賴春水つと起あがりて聲たかく、いかにや／＼孔恭ぬし我等が御身に交はるは夢々學問とか又は才とかを以てするにはあらざるなり、たゞ／＼御身の家に珍藏の多きそれを見んがためにこそ交はるなり、されば御身と交るといはんよりはむしろ其書畫骨

莅と交はるといはんことこそ妥當なれといふを聞いて流石の孔恭も面打赫らめまかりしとぞ。

其三　腰元お秀

これも亦其頃の話なり江戸牛込の片側にいとさゝやかなる町人の娘お秀といふもの〻ありしが、或人の伜手を以てさるやんごとなき方の邸へ上り奥女中として仕へたりしに、いたく〳〵奥方の心にかなひ御覺まことに目出度く、永年の奉公首尾よくすんでやがて退りなんとせる年の春おほけなくも忝なくも、御見立を以て奥でせう松本早苗といへるもの今は年も更けて適立派なる士となり來ん年よりは表面の御奉公親なるもの〻名代をも勤めなんとするもの〻妻と定まり朋輩の羨の種とぞなりぬ、或日お秀二人の若徒を從へ奥方の名代として傳通院へ參りしに、其途中に於ていともきたなき羅宇すげ替の老人に逢ひたり、お秀の面を注け〳〵と打守り何にやありけん物いひたげなる素振なるに此方は心得ず思ひながらよく〳〵見れば母の兄なる人、お秀が爲には叔父なりけり、はと思ふま〻そば近く〻よりこま金少し紙につゝんでこれを與へ、いと〳〵小さき聲音にて我が身今こそはかゝるまでに出精なし、來ん春は嬉しき事のあるべき筈なり、もし其妨障ともなりなば、如何ともすべき由なし、何卒此後道にて逢ふことあるもお秀なぞは其なりにては呼びかけたまふべからず、後々は父母と共々必ず見捨まじと若徒に聞へざる様心をかねて言ひければ、叔父なる人は何思ひけん、紙に包みしこま金を投げ捨てゝだみ聲たかく、そはこれ何といふ事ぞや、たとひ如何程出精するとも叔父は叔父にして姪は姪なり、上下の分のいかでか亂るべき正しき武家に奉公なせば少しは武士道の意地も心得是程の事の辨へはあるなるべしと思ひしに、現在叔父なる我が身にむかひお秀といふて呉れるなぞは、やうも〳〵いへたる義理かな、何國いかなる處に行くも姪に様を付ける人のいかであるべき、若徒どの是はお秀とて私しがためには姪で御座るといひければお秀は抗へも入りたき心地顔をかくして逃げゆきしとぞ。

○小兒○

はよく肥へて笑ひ顔の愛らしき筈のものなり瘦せたる小兒は興味尠きものなりこれには彼の有名なる肝油の精と次亞燐酸とを配合して飮み易く且つ味ひよく製造したるスコット乳菓が最も適當なる食料にして忽ち肉を肥し發育を助くるなり●此の乳菓が滋養分に富むとは他に比類なきが故に虛弱なる人々は之れを用ゐて奇効を見べし

特に**虛弱なる婦人**は一度之れを服用せば忽ち健全なる身躰となることと疑なし

○咳嗽及風邪○

は病の初めなり、次に來るものは肺の衰弱にして身躰を瘦せしむ、最後に彼の恐るべき肺病の萠芽を顯すなり彼の有名なる肝油の精と次亞燐酸の調合物なる**スコット乳菓**は能く咳嗽及風邪を去り肺臟を強くして活力を與ふることと實に驚くべし●●●此の乳菓の洪大なる滋養分が**嬰兒、小兒**及虛弱なる母親を益することと實に大にして、其味も至て滋味なれば喜で服用するなり

此の乳菓が精氣を增し滋養分多く最も効驗あるものなるは世界の大醫の擧て證明するところなり

○スコット乳菓の說明書御入用なれば橫濱八十九番日本支那貿易商會へ此の雜誌にて御承知の旨御申越あれば無代價にて呈す



左の大取次所の外各藥舖にて賣捌き居れば御購求ありたし

橫濱境町	友田嘉兵衛
仝境町	鳥居德兵衛
仝太田町	大川佐兵衛
東京本町四丁目	島田久兵衛
仝室町	資生堂
仝本町三丁目	島田忠兵衛
大阪道修町二丁目	小西儀助
仝道修町二丁目	武田長兵衛
仝道修町三丁目	田邊五兵衛
仝道修町二丁目	田畑利兵衛
仝道修町二丁目	福田淸右衛門
仝道修町二丁目	鹽野儀三郎

明治廿五年九月廿四日遞信省認可

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地株式會社秀英舍印行